

関東地方弥生時代中期中葉の社会変動

石川 日出志

要旨 関東地方南部における弥生文化の展開にはいくつかの転換期がある。弥生前期から中期前半（BC. 3～2世紀）は縄文時代からの伝統が顕著であるのに対して、中期後半（BC. 1世紀）になると、突然、環濠集落を含む本格的農耕集落群が出現するのは、そのもっとも大きな転換である。この問題については、中期後半の宮ノ台期に東海方面からの移住者によって本格的農耕社会が形成されたという見解と、いまだ資料不足だが中期中頃の漸進的段階を経てこの地域の中で独自に宮ノ台期の社会が形成されたという見解の、二通りの意見が並立していた。ところが、1998年に行われた神奈川県中里遺跡の発掘調査成果は、この二つの見解の双方に大幅な修正を要求することとなった。

そこで本稿では、主に南関東の既出資料について、土器の型式学、土器による地域間交流、集落の規模・立地、集落群の構成、墓制の内容、の諸点を取り上げて、この問題の解決に当たった。

その結果、弥生中期中頃の中里期（BC. 100頃）に、南関東から埼玉県北部域までの広い範囲で、急激な社会変動が進んだと理解した。つまり、中里遺跡のような低地に立地する本格的稲作対応集落が各地に形成され、それを核として次の中期後半の各地域社会が編成され、墓制面でも再葬墓から方形周溝墓への転換が急速に進み、その基礎として遠隔地との情報交換が顕著に認められる。

この段階は、南関東のみならず東日本一帯の弥生社会の重要な転換期に当たっており、さらには北海道の続縄文社会の動向とも関係することをも予察した。

キーワード：関東地方、弥生中期、中里式土器、地域間交流、本格的稲作農耕社会

1. 中里遺跡調査成果の波紋

神奈川県西部の足柄平野南東部に立地する小田原市中里遺跡は、1952・55年に石野瑛氏（石野 1954・57・61）、1955年に杉原荘介氏（杉原 1956）が発掘調査を行い、関東における宮ノ台期に先行する古相の弥生土器を出土する遺跡として知られてきた。それが1991年に第三地点の発掘調査で、同時期の方形周溝墓46基が検出され、その母集落が平均2ha以上の宮ノ台期環濠集落に匹敵する規模になる可能性が出てきて、注目を集めた（呉地・戸田 1997）。そしてようやく1998年になって中里遺跡の待望の集落部分＝第Ⅰ地点約3.1haが発掘調査され

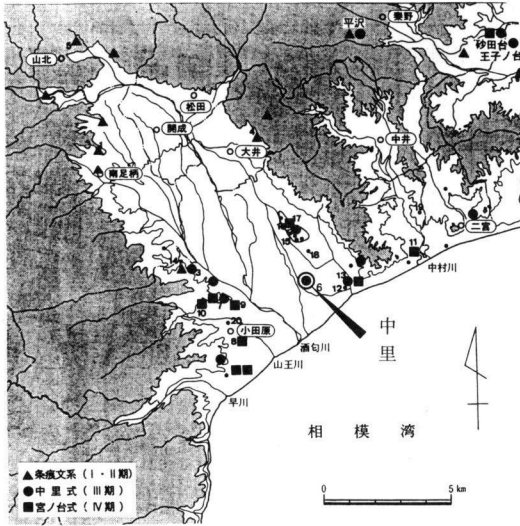
た。約 3000 m² の 1999・2000 年度調査分を含めると、竪穴住居跡 97 基、掘立柱建物跡 68 基、土坑 830 基、井戸 6 基の密集する遺構群と河道跡、溝が検出され（第 1 図：戸田 2000）、予想をはるかに越える規模・構成であることが判明した。

この調査によって従来の二通りの見解、すなわち南関東では宮ノ台期になって前代の社会を否定するかのように本格的な稲作農耕集落・社会が突如として出現したという見解（岡本 1976 ほか）も、それはその前段階＝中里併行期にすでに宮ノ台期の諸要素が出現し始めているのが資料不足のために見えにくいだけであって、南関東の中で漸進的に宮ノ台期社会は形成されたという見解（石川 1985・92）も、いずれも大幅な軌道修正を余儀なくされた。

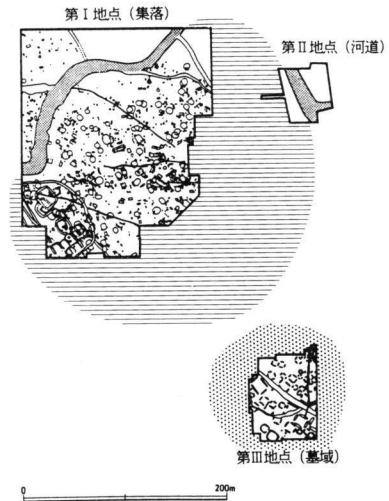
これまで詳しく論じなかったが、後者の立場では、中里期について次のような理由から、弥生中期前半期社会から後半の宮ノ台期社会への過渡期と考えてきた。

- ①土器：弥生前期・中期前半の条痕文手法が後退し、宮ノ台式の基調をなすハケメ整形が導入され始める。壺の装飾も縄文以来の単位文が多く残存する一方で、櫛描き文装飾原理の間接的影響により多段の帯状構成が定着し始め、次の櫛描き文受容の礎地となる。
- ②集落：王子ノ台・子の神遺跡の事例からみて住居数基で構成される小規模集落が基本である点は前代と同様だが、一方で埼玉県池上小敷田遺跡のようにやや大形の集落も出現し始め、環濠的役割を果たす区画溝が掘削されることがある点は宮ノ台期集落への過渡的な姿とみられる。
- ③墓制：中里遺跡第Ⅲ地点・静岡県山下遺跡・千葉県常代遺跡・埼玉県池上小敷田遺跡のように、宮ノ台期と同じ墓制である方形周溝墓が出現しており、中期前半までの再葬墓は急速に終息する。
- ④石器組成：埼玉県池上小敷田遺跡の例から判断して、前代以来の打製石斧主体の組成に、宮ノ台期に主となる大陸系磨製石斧類が少ないながらもセットで加わる。

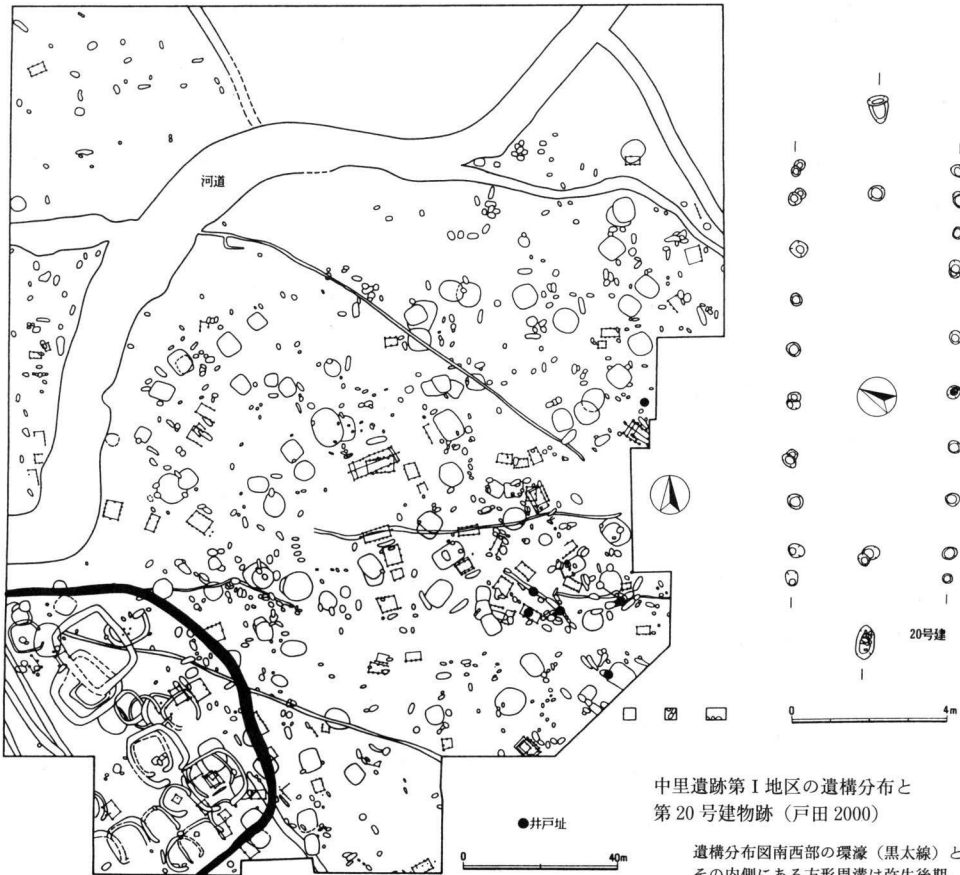
墓制についてはすでに中里遺跡第Ⅲ地点の成果によって軌道修正を行っており、土器については資料の充実がはかられたものの根本的な修正はせずに済むと思われたが、集落と石器組成については全く予想外であった。つまり、集落は環濠こそ巡らないものの 5 ha 内外もの規模をもち、宮ノ台期でさえ確認例のない掘立柱建物多数を伴う集落構成で、中央部には大形の独立棟持柱建物が配置される。低地部に集落を構える点も宮ノ台期にはこれまで稀薄であった。石器は打製石斧の組成率は低く、むしろ宮ノ台期に似る。また、瀬戸内東部から搬入されたと思われる土器が確認された点も、こうした集落の出現経緯とからめて注目された。その結果、中期前半期から後半期への過渡的な様相を呈する段階という評価は妥当性を欠くと思われた。そこで、中里遺跡の調査成果に導かれて南関東における本格的農耕社会の成立過程や弥生文化の展開様相について考えを改め、何度かその骨子を紹介した（石川 1999a・b・2000a・b・c）。しかし、口頭発表と発表要旨・記録集が主であって、意を尽くせない部分があるので、不足を



中里遺跡と周辺の遺跡 (大島 2000 に加筆)



中里遺跡の広がり (戸田 2000 に加筆)



中里遺跡第 I 地区の遺構分布と
第 20 号建物跡 (戸田 2000)

遺構分布図南西部の環濠 (黒太線) と
その内側にある方形周溝は弥生後期。

第 1 図 中里遺跡と周辺

補った上でここにその全体像を示すこととする。

本稿では、中里式土器や集落構造については同遺跡の今回調査資料の整理結果をまって再検討することとして概略にとどめ、中里式及び併行期の南関東周辺地域における外来系・遠隔地系土器の状況を確認し、次いで低地に占地する集落の類例を求め、集落群＝地域社会の姿を模索し、合わせて墓制の転換にも触れて、中期中葉段階が南関東周辺はもちろん、東日本弥生社会の大きな変動期であることを述べる。

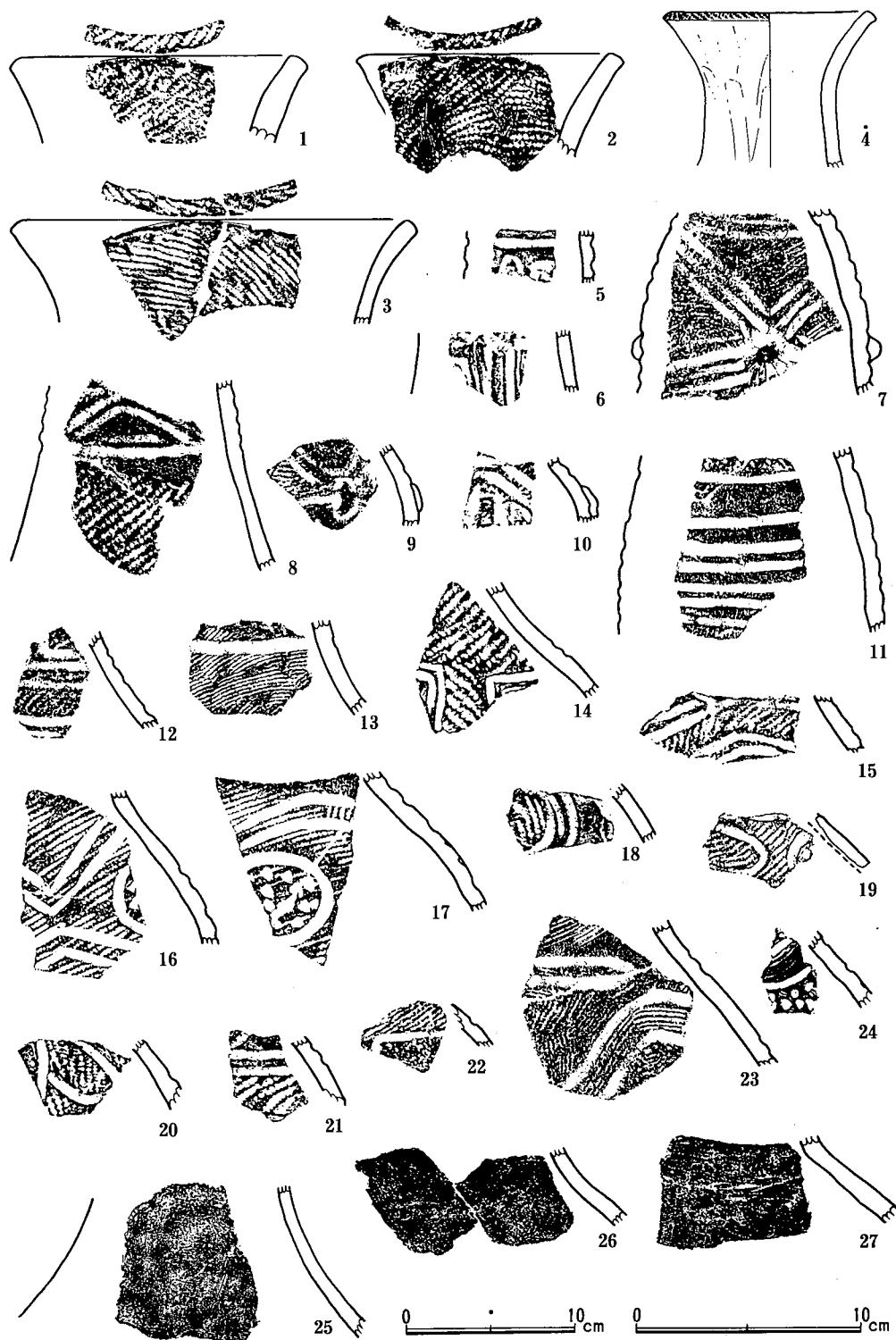
2. 中里式土器と平沢式土器

(1) 杉原調査資料と中里式土器

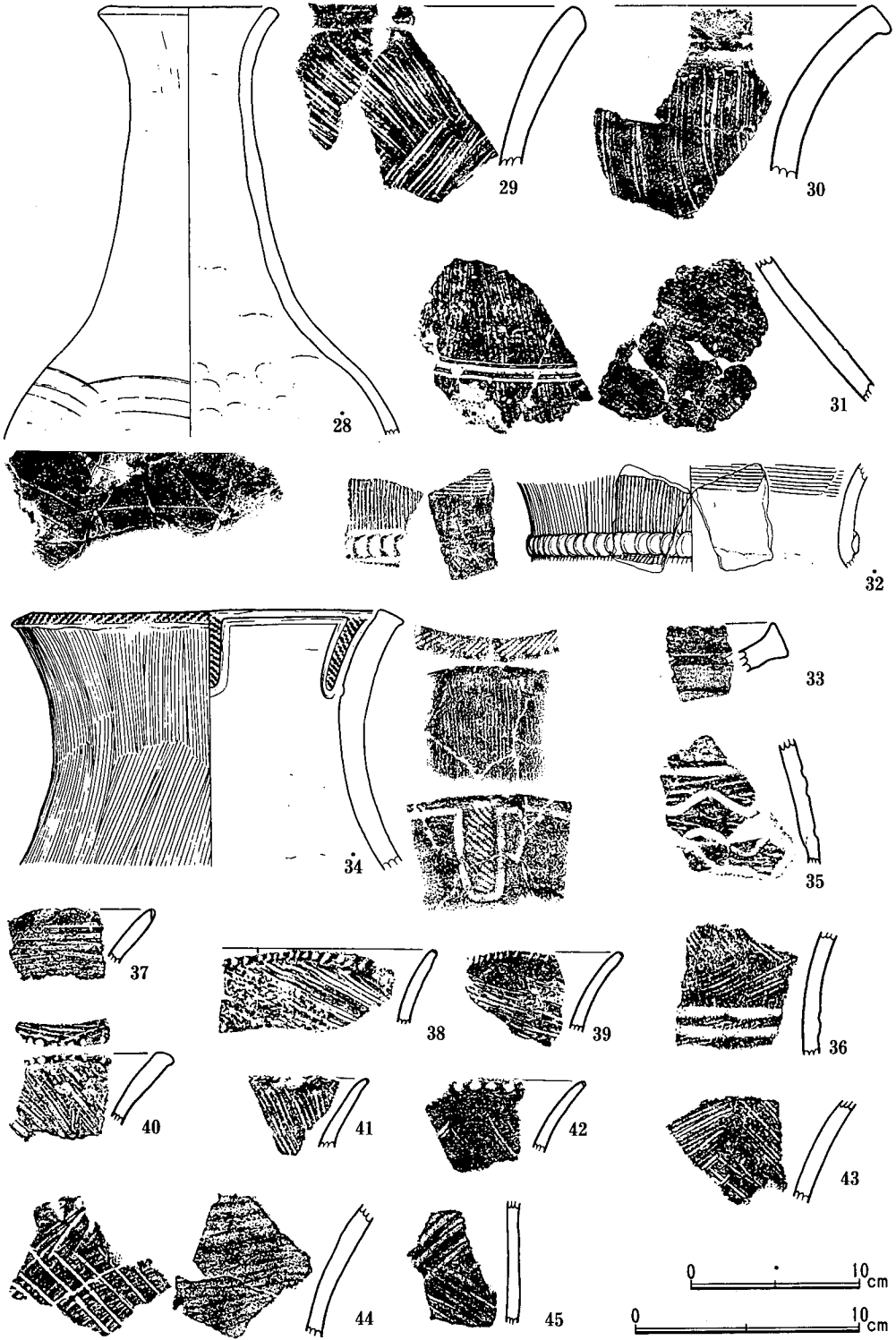
中里式土器の名称は杉原氏の調査資料の検討をもとに神沢勇一氏が用いたのが最初である(神沢 1963・1966)。当時、宮ノ台式土器に先行する土器型式として須和田式土器が設定されていた。神沢氏は、壺の特徴は須和田式に合致するものの、甕は須和田式では縄文ないし縄文とヘラ描きによる装飾をもつ半精製品であるのに、中里式では斜行条痕や粗いハケメが施され、少数の横羽状条痕が加わるという違いを型式設定の基準とし、須和田式と中里式を地域差として捉えようとした。しかし、須和田式土器の甕は有文か条痕文か、あるいは両者を含むかという基本的には杉原氏と同じ論理(杉原 1968)のうちにあった。また、中里式とこれに先行する堂山式とを比較して、条痕甕という共通性と、条痕の強弱や縦羽状条痕の有無といった違いに注目した点は、条痕甕の型式変遷を追う新たな議論の展開を準備したはずであった。しかし、利島のケッケイ山遺跡、伊豆半島の鴨ヶ池遺跡をも条痕甕というだけで中里式に含めてしまい、中里遺跡資料との比較はなされなかった。

筆者も 1985 年から、神沢氏と同じ資料に基づきながら、全く異なる範疇で中里式という型式名称を用い始めた(石川 1985)。平沢北開戸遺跡資料を標式とする平沢式に後続する型式だが、具体的内容を提示しなかったために賛同を得るべくもなかった。東京都芝公園遺跡の壺(杉原 1968)が平沢北開戸・佐倉市天神前両遺跡資料と器形及び条痕文の有無の点で全く異なることに注意した点が発想の起点だが、直接には 1978～1981 年に行われた埼玉県行田市池上遺跡の発掘調査(中島ほか 1984)によって平沢・天神前両遺跡と明瞭に異なる所謂須和田式の一群が豊富に出土したことによる。しかも、池上遺跡の甕の中に、口頸部が縦走、その直下の胴部が横走の条痕の実例(第 16 図 1)があって、中里遺跡の甕と対比できるとともに、両者間で甕における条痕手法に顕著な違いがあることも明らかとなった。そしてハケメ整形の出現は宮ノ台式土器整形技術の先駆けと考えられ、中期前半の平沢式と後半の宮ノ台式土器の間を繋ぐ型式として中里式を理解したのである。

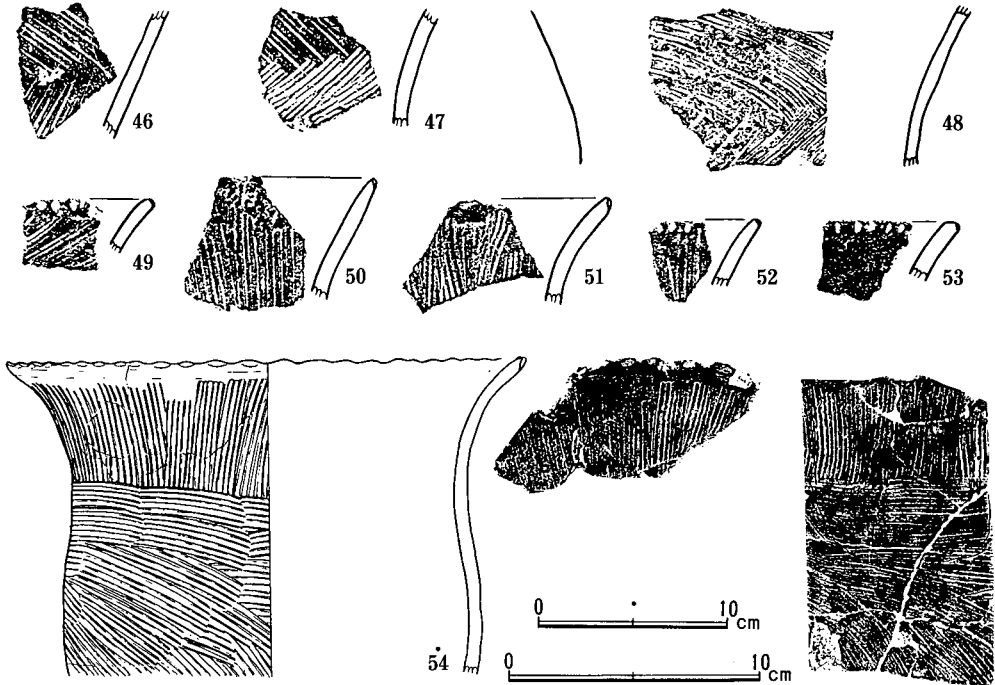
しかしながら、こうした理解の基準となった杉原資料については公にしなかった。この機会に概略を提示しておこう(第 2～4 図)。わずか 1 日の調査で土坑 1 基が検出され、調査地



第2図 中里遺跡 1955年調査資料 (1)



第3図 中里遺跡 1955年調査資料(2)



第4図 中里遺跡 1955 年調査資料 (3)

点は 1998 年度調査区範囲内のはずだが、より詳しくはわからない。土器は木箱 4 個分で、うち 1/3 は弥生後期に属す。

中期中葉土器は壺 (1~34) と甕 (35~54) からなる。壺は、細頸壺 (1~28) と広口壺 (29~34) があり、前型式以来の薄手の一群の他に厚手の一群 (29・30・34) が明瞭な特徴がある。細頸壺の場合、口縁部は幅広い縄文帯で、頸部から胴上部までは広く装飾帯となる。胴下部は条痕で、底面は網代痕が多い。装飾帯は、太い篦描き文で四角・三角・菱形・小円などの構図が描かれ、縄文 LR が地文、ないし充填される。平沢式壺と類似する点が多いが、①口縁部が大きく外反し、幅広い縄文帯となること (1~3)、②頸部の構図から条痕が欠落すること (4~13・28)、③胴上部の構図中には条痕充填手法が残るがハケメに近い細い条痕であること (23・24)、④平沢式壺に特徴的な石英砂の多いザラついた胎土の比率が低下すること、⑤条痕文壺から条痕手法が脱落する現象の一環として口頸部全面無文の壺が出現する (4・25~28) などの違いがある。構図は、平沢式を継承するものが多いが、重菱形文 (14)・王字形文 (22) など新たな類型も出現する。縄文が平沢式に特徴的な充填手法 (7・14・15・19・22・23) の他に地文手法の例 (16・17) も明瞭である。長頸壺の頸部が膨らむ一群 (7・9~11) は平沢式後半=遊ヶ崎段階の特徴を継承発展したものである。また 34 を典型とする太頸壺は平沢式にはなかった器種で、広口・太頸であるだけでなく、口縁の外反が緩い、ハケメが顕著、明褐色を呈するの諸点も平沢式と際立った違いとして注意される。34 の口縁内面の舌状文は、王

字文と同様に主に平沢式の結紐文の仲間が型式変化したものである。外面の条痕文の施文法が甕と一致する 29 や 30 は厚いつくりでなければ、甕と識別がつかない。櫛描き文として、29 の口縁部端面に波状文、31 の肩部に直線文が確認できるが、29 では横羽状条痕文との併用であること、31 の直線文は 3 条単位であることから、直ちに所謂櫛描き文土器と同一視はできないであろう。

甕は、口頸部の構図と口縁部・頸部破片の点数を点検すると、a 横ないし斜走条痕 (37~41 : 口縁部破片 5 点-頸部破片 5 点)、b 縦羽状条痕 (42・43 : 口 3 点-頸 2 点)、c 横羽状条痕 (36・44~49 : 口 3 点-頸 9 点)、d 縦条痕+胴部横走条痕 (口 5 点-頸 11 点)、e 無文 (口 1-頸 0) で、b・e は少なく、a・c・d が多い。d の上=縦、下=横の構成は、原体は異なるものの堂山式から宮ノ台式まで存続し、本型式でハケメ整形が急速に普及したことがわかる例である。c の横羽状条痕は中部高地から駿河周辺に広まり、さらに篋描きとなって宮ノ台式・有東式に続く要素である。粗い条痕を地文として横羽状文を描く 44 はケッケイ山遺跡の甕と酷似し、中里遺跡の上限を考える上で重要な資料である。35 は条痕地に篋描きの装飾をもつ甕で、36 は頸部に羽状条痕を地文として、その下に篋描き太沈線 2 条を加え、駿河特有の「ナデ消し沈線」・「指ナデ凹線」と同様の効果を上げた例である。

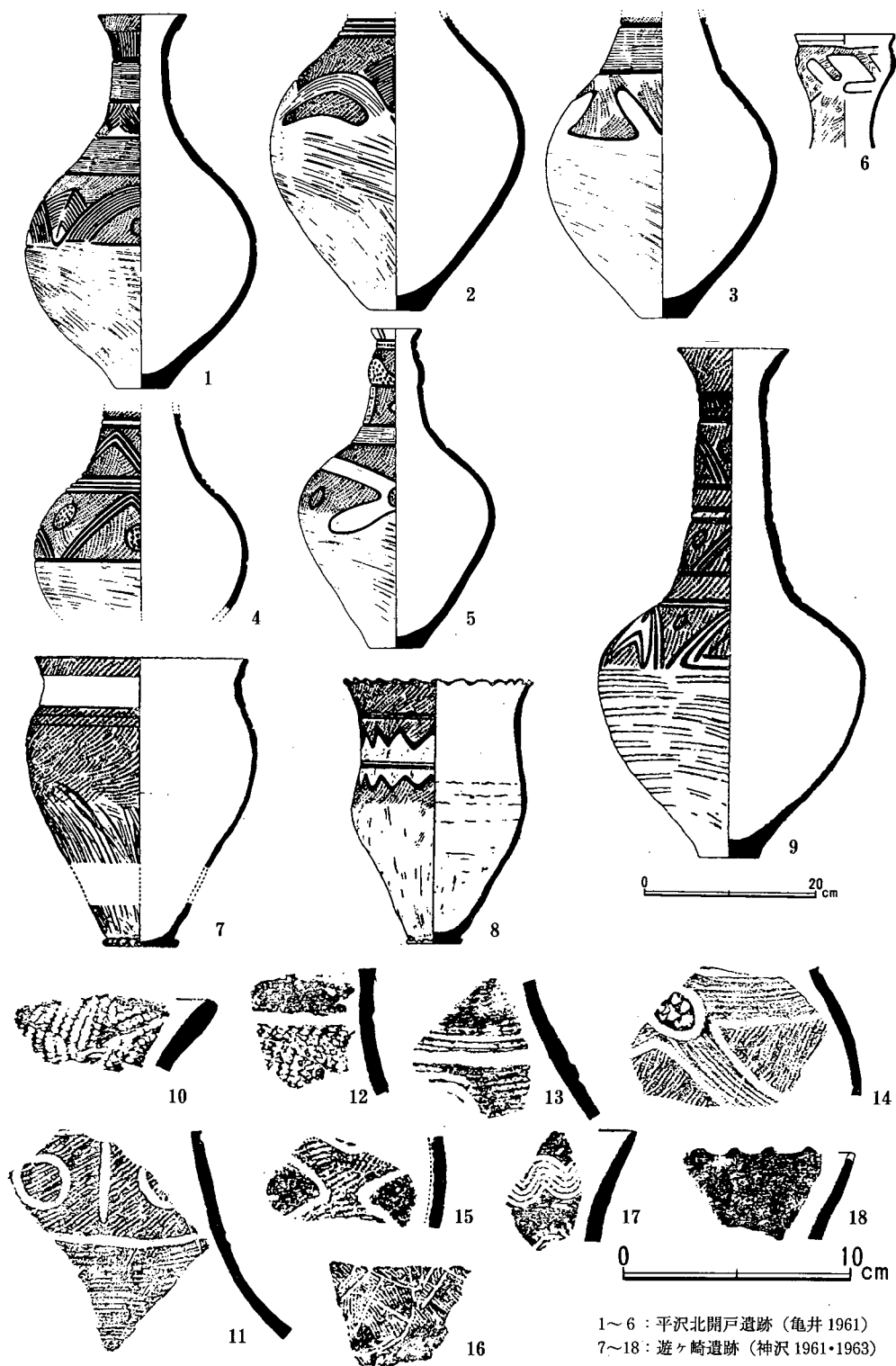
中里遺跡資料で注目されるのは東部瀬戸内系土器で、ハケメ整形の 32 は瀬戸内地方に特徴的な頸・胴部界に指押突帯を巡らした壺の破片である。かつて資料確認した折に瀬戸内との酷似が気になりながらも当然ありえないこととあったので、兵庫県千代田遺跡資料などからの紛れ込みの可能性を考えていたが、1979 年に『神奈川県史考古資料編』が刊行され、収録された地元収蔵資料の中にも同様の例があったので偶然とは思えなくなった。さらにその後、黒沢浩氏が点検して、同種資料と思われる口縁部の小破片 1 点 (33) を見つけ出していた。

以上が杉原氏調査資料の概略である。資料が少ないため各属性の組成が明らかではないが、基本的特徴は理解できるし、杉山博久氏が紹介された資料 (杉山 1970) の特徴とも合致する。そして小田原市内の府川・諏訪の前遺跡 (杉山 1968・杉山・湯川 1971) や三ツ俣遺跡 (伊丹ほか 1991) で検出された資料中にも同じ型式範疇の一群が見える。さらに調査報告が昨秋刊行された東海大学湘南キャンパス内の平塚市王子ノ台遺跡でも、東部瀬戸内系統の土器が不明瞭である点を除けば、基本的に同じ特徴を備えた資料がまとまっている。

(2) 平沢式土器との違い

中里遺跡出土土器は、前述のように杉原・神沢両氏によって所謂須和田式土器ないしその地方型式と理解されたが、現在までの所見によれば、秦野市平沢北開戸遺跡出土土器を指標とする平沢式土器に後続する型式と判断できる。

平沢式の壺 (第 5 図 1~5) は、頸部~胴上部に幅広い沈線で構図を描き、その内外に縄文



第5図 平沢式土器の新古相

と条痕を充填し、胴下部は全面条痕とする。条痕を充填せずに沈線のみで構図を描く例(4)もある。頸部に横走条痕帯を盛んに用いる点は水神平式系統の岩滑式や丸子式と一連の特徴であり、頸部の横走条痕帯の間に単位文からなる装飾帯を置く(1・3~5)。壺の場合、石英砂の多いザラついた胎土も特徴である。甕は厚木市岡津古久遺跡に単斜条痕の例があり、さらに堂山式の秦野市平沢同明遺跡例と中里式の甕との繋がりから口頸部縦・胴部横~斜条痕の甕などが加わるほか、所謂須和田系有文甕の変種が伴うはずである。しかし甕はいまだ資料不足である。

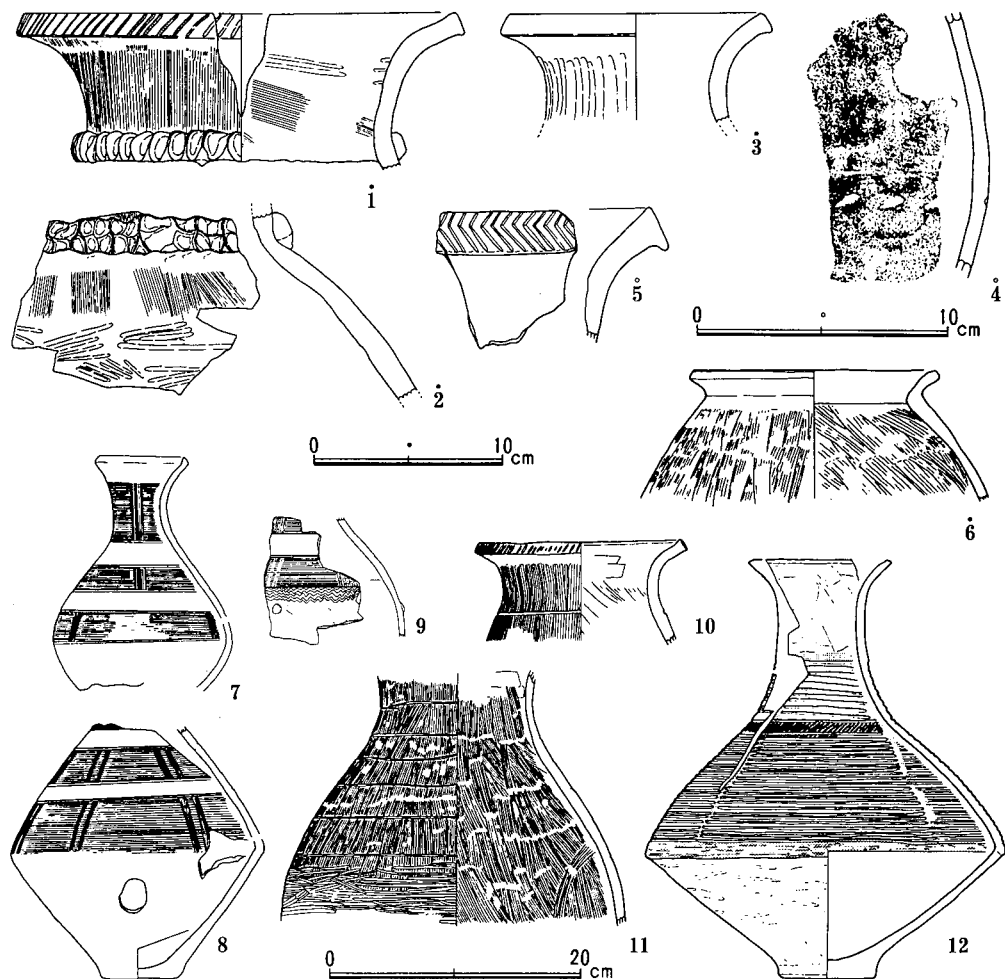
三浦市城ヶ島遊ヶ崎遺跡の資料は、従来平沢式に含められてきたが、平沢北開戸遺跡よりも新しい特徴をもっており(石川 1996)、中里式の範疇を理解する上で重要である。つまり、壺は口縁部が拡張して大きく外反し、頸部も長く伸び、頸部の単位文装飾帯も拡張する(9)。頸部に胴部と同種の構図を配置する特徴(鈴木 2001)は、平沢式の1から4への変化の延長線上で理解できる。平沢式で頸部の横条痕帯であった部分が縄文(9)や無文となる例(12)が出現し、胴上部装飾帯でも条痕の省略によって充填縄文のみの構図が表れる(15)。甕では有文系(7)と条痕文系(8・17・18)があり、条痕文系甕で条痕の施された一群が伴うが後退する傾向がある。8や17の櫛描きの波状文・直線文は、群馬県吉井町神保富士塚遺跡(小野ほか 1993)や長野県大町市来見原遺跡(島田 1988)のような中部高地系統の条痕文系櫛描き文甕が簡略化されたものであって、東海・近畿系の櫛描き文とは区別すべきである。このように壺の装飾部や甕から条痕文が後退している点に平沢式との明瞭な違いを指摘できるとともに、ハケメ整形がいまだ採用されない点で中里式とも決定的に異なる。

さらに中里式は、壺・甕とも平沢式の系統をひくが違いも明瞭である。幅広い沈線で構図を描きその内外に縄文と条痕を充填する平沢式に特徴的な手法が、遊ヶ崎段階から中里式へと比率を低下させ、中里式の充填条痕は細く、ハケ状となっている(第2図 23・24)。壺の胴下部や甕に条痕は存続するが、平沢式よりも細く浅い傾向があって、板を折った小口面を用いたかのような粗い条痕文(第2図 29・30・38・39・40)、針葉樹材の板であることが確かでハケメの範疇とすべきもの(34・41・50・51・54)も特徴的である。では、平沢式遊ヶ崎段階との決定的な違いであるハケメの普及はどのようにして達成されたのであろうか。その際に注目したいのが東部瀬戸内系土器や濃尾平野の貝田町式系統土器の存在であり、これらにおいてハケメの普及は考えられない。

3. 中里期の西方外来系土器

(1) 東部瀬戸内系土器と貝田町式系土器

中里遺跡に東部瀬戸内系土器が存在することを、最初に公表したのは大島慎一氏と杉山浩平氏である(大島 1997・杉山 1998)。とくに杉山氏は『神奈川県史』に収録された例をはじめ3点の資料(第6図 1~3)を挙げて、西摂(摂津西部)の弥生土器Ⅲ-1様式に対比できるとし



1～3：中里遺跡（杉山 1998），4：王子ノ台遺跡（大島ほか 2001），5～12：常代遺跡（甲斐 1996）

第6図 中里・常代遺跡の外來系土器

た^①。1998 年からの調査でも多数出土し、篠宮正・森岡秀人両氏により兵庫県東部からの搬入品として問題ないと判断されている。そして、篠宮氏が神戸市西区玉津田中遺跡出土土器の分析（篠宮 1996）でⅢ-1 様式の壺を 17 種にも分類しているように、瀬戸内東部の該期の壺は器形と装飾が変化に富むにもかかわらず、中里遺跡で出土するのは篠宮氏が広口壺Ⅱとした櫛描文をもたぬ一群が圧倒的多数を占め、他の壺や甕・高杯が希薄であることも、際立った特徴とされる。中里遺跡を瀬戸内方面から移住してきた人々の集落とみる発言もあるが、これら搬入土器が土器全体の数%に限られ、在来系の中里式土器が圧倒的多数を占めるために成立し得ない。しかし、中里遺跡の形成過程を考える上で最重要資料であることに違いはない。

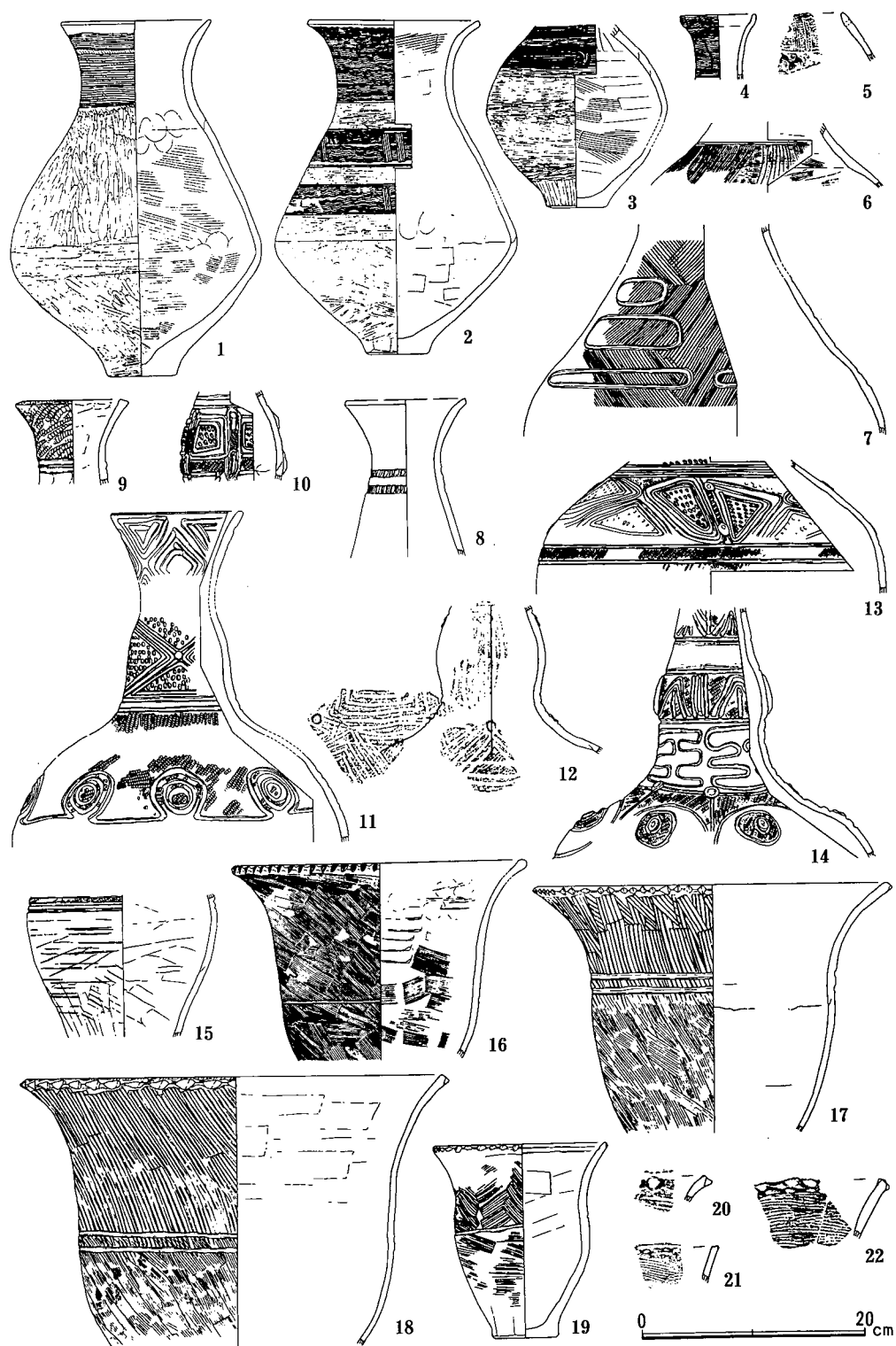
ところが、東部瀬戸内系土器は千葉県君津市常代遺跡でも出土しており、中里遺跡にのみ見られる現象ではない。第6図5・6がそれで、6の甕はすでに報告書で甲斐博幸氏が寺沢薫・

森井貞雄・宮崎泰史各氏の指摘として近畿周辺からの搬入品と指摘している（甲斐 1996）。5 は指摘されなかったが、肉厚な器壁と口縁部の屈曲、口縁端面の羽状の刻みから明らかに中里遺跡と同じ広口壺しの口縁部破片である。神奈川県平塚市王子ノ台遺跡でも破片ながら瀬戸内系の可能性ある胴部に列点を連ねた甕破片（第6図4）があって、瀬戸内系の影響が及んだことが伺え、重要である。

そして常代遺跡には、瀬戸内系土器は2点のみであるが、遠隔地系統の土器として貝田町式系統の土器がより明瞭であることも注目される。器形が復原できる資料を7～12に掲げた。7～9は細頸壺で、頸部と胴上部に櫛描き直線文帯を置き、これを縦直線で切る丁字文の一群で、破片の例数も多い。石黒編年（石黒・宮腰 1996）のⅢ-2期に対比できるであろう。12は篋描きで縄文まで施文され、在来の施文手法の文様ながら、胴部やや下方の屈曲、胴上部の構図は明らかに貝田町式の模倣品である。10・11も櫛描き手法は脱落しているが、貝田町式系統とみなしてよからう。この常代遺跡における瀬戸内系土器と貝田町式系統の土器のあり方は、両者が別個に存在するのではなく、相互に関連しあって、つまり瀬戸内-濃尾-南関東の遠隔地間交流のなかで実現した現象と理解する道を開く。瀬戸内系土器のみを重視するのではなく、一連の動向として関連づけて理解する方策である。

そうすると、南関東だけでなく、駿河地方でも貝田町式系統の土器が客体として検出される事例があり、当然のことこれらも中里・常代両遺跡における遠隔地系土器の定着と一連の現象として注目される。第7図は静岡市有東遺跡第16次調査の折に土坑SK05で集中出土した土器群で、1～5が貝田町式系統の土器である（岡村 1997）。7・9～22が主体をなす土器群で、壺の装飾帯から条痕が完全に抜け落ちて、平沢式で条痕が充填されていた部分が無文となる14、三角・方形の単位文のなかに刺突文を密集させる11・13の特徴は平沢式との隔たりが大きく、条痕のみを地文として太い沈線で構図を描く駿河独特の手法（7）は王子ノ台遺跡でも確認できる（大島ほか 2000：第11図3・第51図1）ので中里式と接点をもつ。さらに描線が細線のための12、胴部文様帯の下に区画線が明確な帯をなす14・15といった特徴は、中里遺跡杉原調査資料や王子ノ台遺跡よりもさらに新しい傾向と見ることもできよう。駿河では平沢式壺が広く定着したのを基盤として、これら中里式系統の壺が定着し、また条痕のみを地文として太い沈線で構図を描く7など駿河在来の系統も組み合わせる。

そうした中に貝田町式系統の土器が共存する。1・2は太頸で口縁部の外反が弱く、胴部の張り出しも軽く、3も胴部最大径が中位にあって朝日式に近い器形をもつ。胴上部の横帯がない1や胴上部に2帯を置く3の装飾帯も同様である。しかし、2・3は沈線区画内に櫛描き波状文を充たす手法をとり、丁字文・擬似流水文も貝田町式の範疇であるから、貝田町式でももっとも古い段階（Ⅲ-1期：石黒・宮腰 1996）に対比するのが妥当であろう。6は天竜川以西の三河～西遠江に分布する瓜郷式の壺で、4・5も貝田町式か瓜郷式である。嶺田式の8も東遠



第7図 静岡市有東遺跡第16次調査SK05土坑出土土器 (岡村 1997)

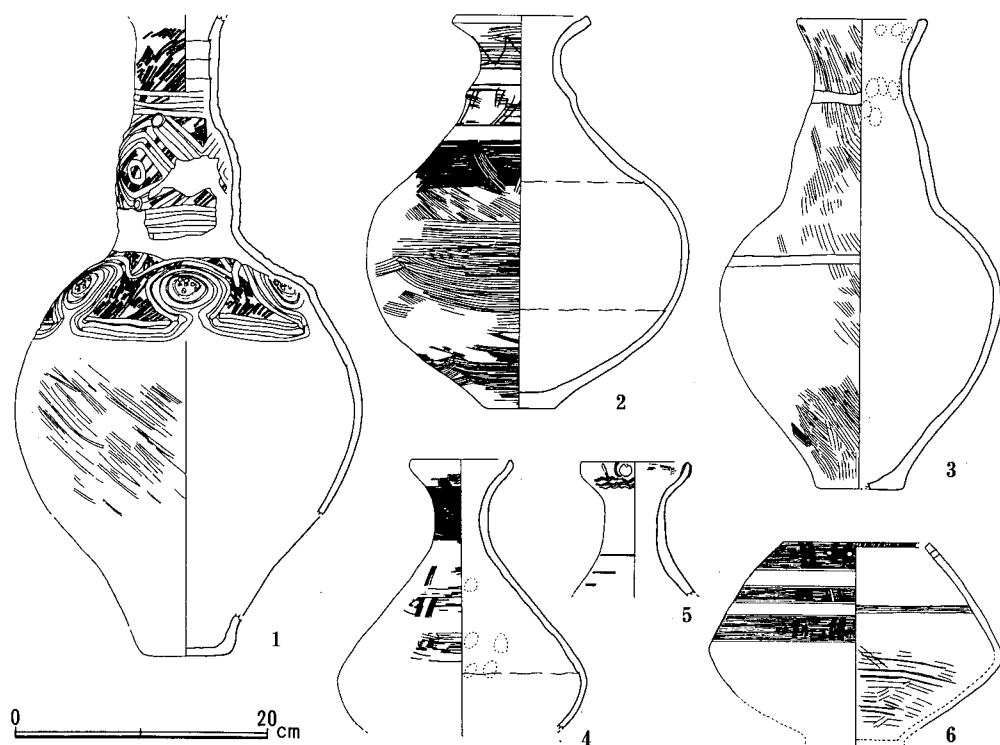
江系であるから外来系としてよい。したがって、SK05土坑では駿河以西、濃尾平野までの範囲の土器が搬入ないし模倣され、しかも5個体に及び、中里遺跡における東部瀬戸内系土器を上回る比率であることは重要である。静清平野では有東遺跡以外に、静岡市瀬名遺跡7区出土資料（第8図1～5：中山ほか1994）の中にも、瓜郷式（2）や貝田町式系統の土器（4・5）が確認でき、清水市下野遺跡でも貝田町式か瓜郷式とみなせる資料（6：中西ほか1985）があるから、有東遺跡が特異な訳ではない。

さらには、東部瀬戸内系と濃尾～遠江系との違いはあっても、中里遺跡と有東遺跡とでは遠隔地系土器の明瞭な波及が認められ、厳密な意味で同時期かという問題は残るとしても常代遺跡では両者とも確認できることは重要である。

（2）東部瀬戸内系土器の在地模倣

ところで、常代遺跡では貝田町式系統の土器の模倣・改変が明瞭であった。貝田町式系土器と東部瀬戸内系土器とが一連の動向の中で南関東にもたらされ、受容されたと主張するのであれば、東部瀬戸内系土器もまた当地域で模倣・改変が行われたことを立証する必要がある。

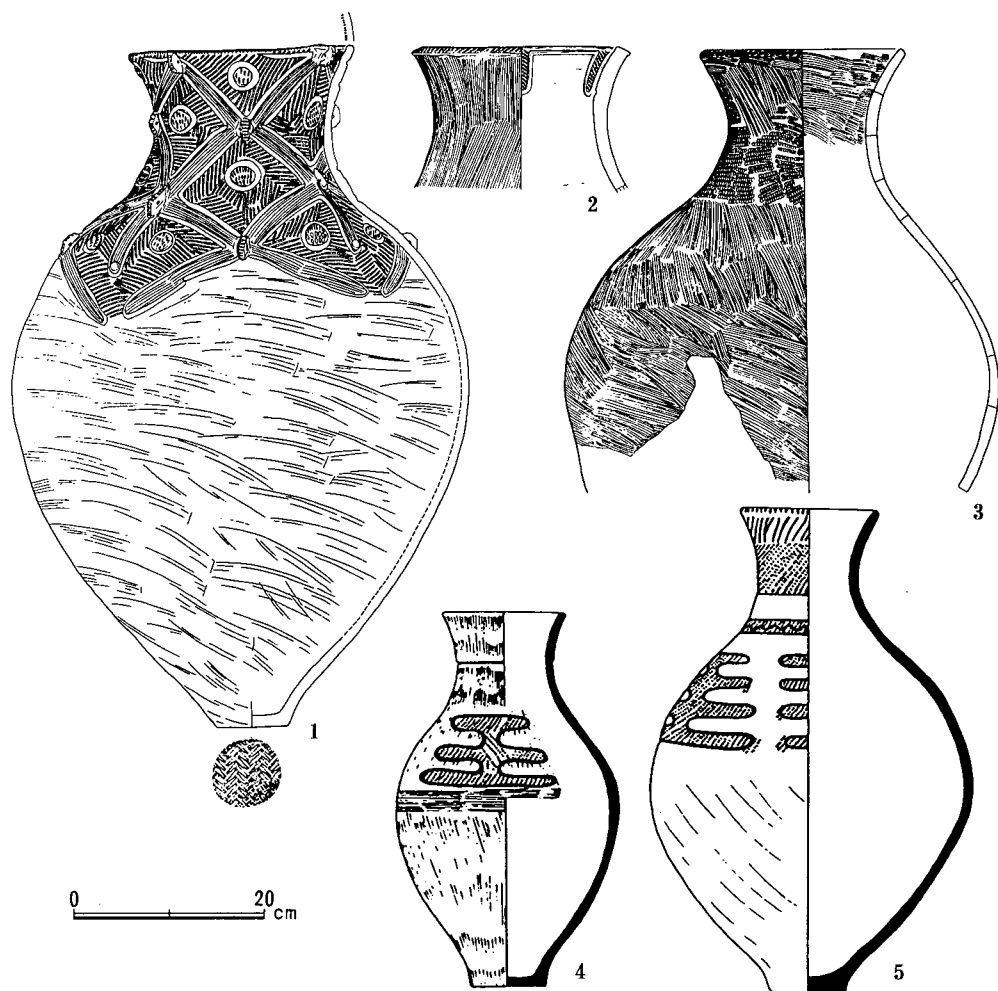
その場合に注目されるのが、中里遺跡第9図2（＝第3図34）である。2は、杉原調査資料



1～5：瀬名遺跡（中山ほか1994），6：下野遺跡（中西ほか1985）

第8図 静岡市瀬名遺跡・清水市下野遺跡出土土器

の壺のなかで、瀬戸内系土器を除いて壺で唯一ハケメ調整を施した実例であり、明褐色で他の土器よりも明るい色調をとる。口縁部内面の舌状文は平沢式の結紐文と北関東系土器の要素とから追跡できる構図であり、口縁部端面の縄文施文は第2図1~4と連動する在来の手法である。しかしながら、著しく器壁が厚い、太頸、口縁部が短く外反が弱い、口縁部端面を平坦に整える、ハケメ調整といった諸点は、いずれも平沢式や遊ヶ崎段階には見られなかった属性であり、中里式において突如として成立した器種である。中里遺跡第Ⅲ地点第40号方形周溝墓出土の大形壺（第9図1）も、口縁から胴上部に至る構図は平沢式を継承するとしても、口頸部の器形上の特徴は2と共通し、口端面の内外の稜を刻む手法も瀬戸内方面の壺に類例をみることができる。第3図30も口縁部の外反度を増すが同じ器種と見てよく、その口端面には櫛描き波状文が施文されている。この櫛描き文自体は条痕文系統であるとしても、口端への櫛描



1・2：中里遺跡，3：飯塚遺跡，4：軒通遺跡，5：芝切遺跡

第9図 瀬戸内系要素を受容して成立した大形広口壺

き施文は瀬戸内系要素であろう。図示しなかった破片の中にも、これらと同様に器壁が特に厚い大形土器破片が明瞭であり、安定した一器種とみなしてよい。しかしその一方で、瀬戸内系要素が希薄な王子ノ台遺跡ではこの器種の点数が少ないように思われ、中里遺跡と王子ノ台遺跡との間におけるこの違いもまたこの器種を瀬戸内要素の受容とみる根拠に加えてよい。

さらに中里式に成立したこの短頸広口壺は後続する宮ノ台（有東）式土器にも継承される。第9図3～5がそれで、3・4はなお短頸広口で外反も緩いが中里式の1・2に比べて頸が細く括れる。5ではさらに細頸で、口縁部の外反も強くなり、他の壺との区分が不明瞭となっている。これら3点の壺は、駿豆地方では長伏段階という有東式古段階＝宮ノ台式安藤編年Ⅱ期に属する一群であって、次の長伏六反田（12・14号方形周溝墓）段階＝宮ノ台式安藤編年Ⅲ期になるとすでにこの器種を確認できない状態となる。つまり、これは東部瀬戸内要素の受容によって中里式において突如として成立した器種で、宮ノ台・有東式に継承されながらも在来の器種に吸収されて行く過程を追跡することができる。そうした意味では貝田町式よりも在来の土器型式構造に与えた瀬戸内型式の影響は濃厚であり、しかしまた安藤編年Ⅱ～Ⅲ期における白岩式の強い影響のもと、急速にその姿を消して行くと判断できる。

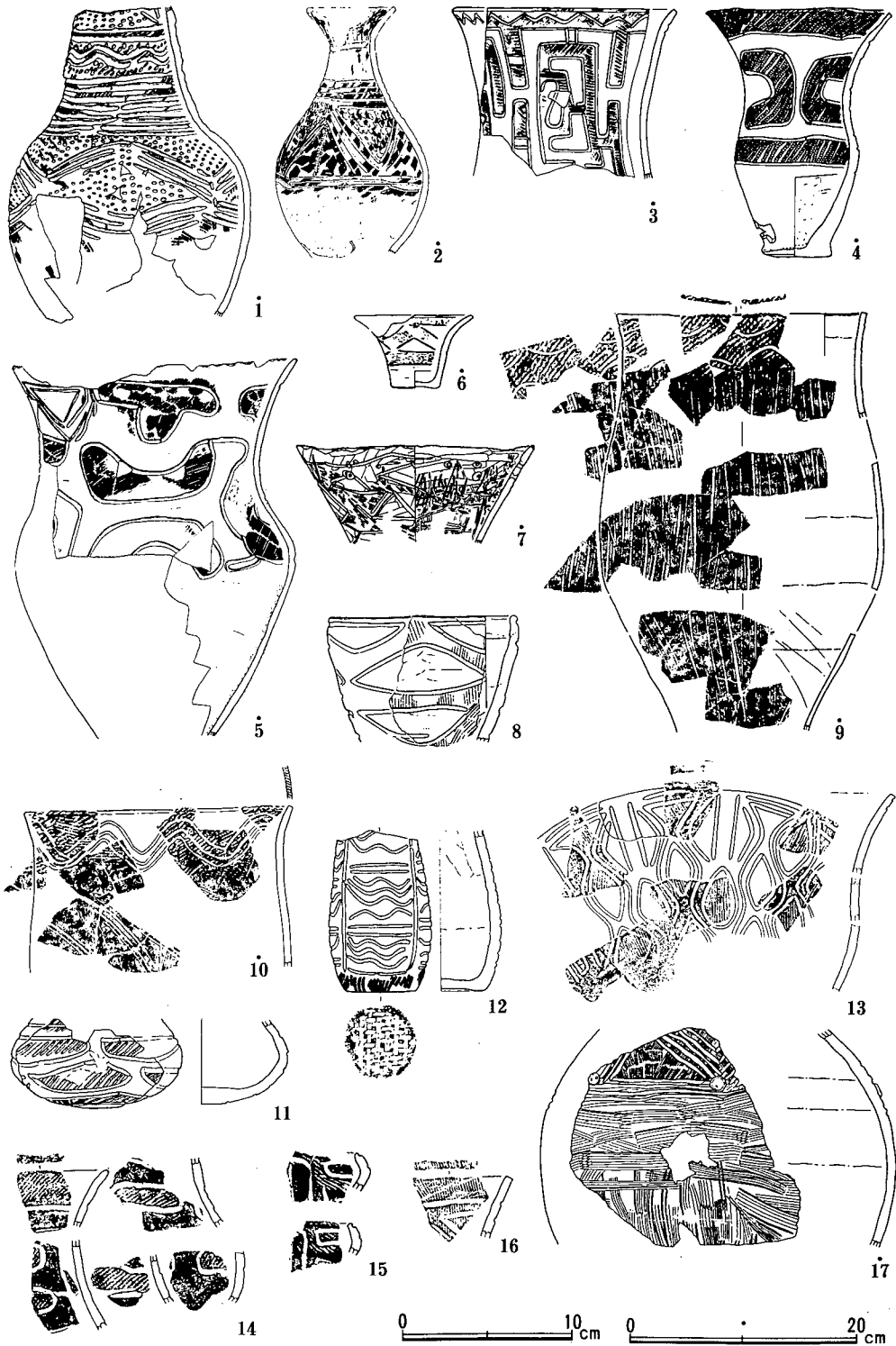
それでは中里式は西方の影響のみを受容しているのかといえば、そうではない。

4. 北との繋がり

(1) 北から南へー北関東西部方面の土器・要素ー

中里遺跡杉原資料の中には池上式や北西関東東域方面とのつながりが明らかな資料はないかに見える。しかし鈴木正博氏は、平沢式に類例がなく王子ノ台遺跡に確認できる第2図14のような重四角文を中部高地と連動するものと指摘する（鈴木2001）。確かに長野市塩崎遺跡松節（伊勢宮）地点21号木棺墓出土広口壺5と類似の構図だが、松節例は所謂大地式の系統を基礎とするものであって（永井1994）、長野方面に定着した時点で重四角文構図の下端は開くのが基本形となる。むしろ14や王子ノ台遺跡例などの重四角文は、出流原式・池上式の壺や筒形土器の重四角文との関係を考慮した方がよいであろう。さらに、王子ノ台遺跡には池上式との関係がより明瞭に把握できる資料群を含んでいる。

第10図9・10は大島慎一氏が甕A種としたもののうち、沈線文様をもつ資料である。大島氏が指摘したように、9や10は多摩ニュータウンNo.815・同No.461遺跡資料と同じ範疇と考えられ、さらには埼玉方面の池上式の有文甕と口縁部文様帯が連動する。これは、前型式である遊ヶ崎段階において、池上式の前型式と連動した甕（第5図7）や中部高地系の群馬県神保富士塚遺跡例と連動した甕（第5図9）が定着している状況が、中里式にも持続したものである。遊ヶ崎例よりも9や10の口縁部文様帯幅が広いのも、池上式の前型式から池上式への型式変化と対応する。もちろん胴部は縦（9）や斜め（10）の条痕が施され、中里式の全面条



1～7：常代遺跡（甲斐 1996），8：長伏六反田遺跡（芦川ほか 1999），9～17：王子ノ台遺跡（大島ほか 2000）

第 10 図 北からの系統をひく土器・要素

痕甕（第3図37～54）と共通するので、中里式の一器種と認定できるが、池上式との連動が内在化・定着している訳である。また福島方面を震源地として北関東に広く定着した筒形土器が池上式に受容され、池上式の特徴的な器種を構成するが、王子ノ台遺跡の筒形土器12・13・14は中里式においても同じ現象が起きていることを示している。さらに、カナムグラの仲間を用いて擬縄文を施した16・17も、池上式を介した影響をよく示してくれる。そして胴上半部を縦条痕とする中里式の甕でもっとも特徴的なタイプの甕dが、池上式土器の標式遺跡である池上遺跡でも1点あり（第16図1）、条痕自体も条線の間隔と太さが不揃いな中里式の甕にしばしばみられるタイプである。つまり筒形土器と擬縄文は池上式から中里式への影響を、甕A種は池上式と中里式の連動を、池上遺跡における中里式甕dの存在は中里式から池上式への影響を、それぞれ示している。

房総南部の常代遺跡でも似た状況が確認できる。第10図1は出流原式か池上式の古い部分、2はその後続型式と思われる例で、ともに搬入品の可能性が高い資料である。3～5も北関東方面の筒形土器の搬入品か模倣品で、破片資料も多く検出されている。池上式方面との連動性は中里式よりも少ないが、搬入品や模倣品が明瞭な点は中里式以上であるといっていよい。

（2）北から南へ—龍門寺式土器—

常代遺跡では、もう一つ注目すべき北方系土器がある。第10図6・7で、6は口縁が開く鉢で構図中に細かい刺突文（報告による）が充填され、底面に布目がある土器、7は6と同種の構図を数段重ねたもので構図に乱れがある。ともにいわき地方の龍門寺式で^{（補注）}、6は搬入品の可能性が高い。8は静岡県三島市長伏六反田遺跡（芦川ほか1999）の鉢形土器で、太い沈線で6と同種の構図を2段重ねた中にカナムグラの仲間による擬縄文が充填されており、龍門寺式の搬入品であろう。長伏六反田遺跡は宮ノ台期の方形周溝墓群であるが、宮ノ台式にまじって中里式併行の資料が散発的に認められ、本例はそれらに伴うと見た方がよい。王子ノ台遺跡でも、龍門寺式と同定するには至らないが、第10図11や報告書（大島ほか2000）第22図26・第40図8は土器の歪みを調整しきらない成・整形技術や丸底という点に龍門寺式の影響が伺える。

このように太平洋沿岸沿いに龍門寺式が南下する現象は、同時期の千葉県大多喜町船子遺跡で茨城県域に分布する格式の壺があり、平沢式併行期の佐倉市天神前遺跡で同じく茨城県域を分布圏とするであろう仮称天神前式の壺と鉢が見られることと連動ないし受け継ぐ動向と見てよからう。中里併行期になるとより北方の龍門寺式が、沿海沿いにより西方の地域にまで姿を見せるよう変化したことを確認したい。

すなわち、中里遺跡の事例から明らかなように、中里期に東部瀬戸内系土器が南関東に突如として姿を表す。しかしそれは貝田町式や瓜郷式系統の土器が駿河～南関東に姿を見せ始める

現象と一連のものであり、さらに同時期には関東の北西部・北関東、浜通り方面の土器型式の影響や相互関係が明瞭に認められる。続く宮ノ台式土器の古い部分（安藤編年のⅡ・Ⅲ期）では東遠江の白岩式の影響が強く認められるとしても、より遠隔地の土器の影響は明瞭ではなくなる。また土器に関する限り、北関東や東北部との影響関係も縮小するようにみえる。中里期が、遠隔地間の相互関係、しかも西から東へだけでなく北から南へなど各地相互の関係が、前後の時期と比較して際立つ段階であることを知ることができるのである。

次に、こうした遠隔地間の相互関係が顕在化した中里期に生じた社会変化を確認することとしよう。

5. 低地占地型集落の定着

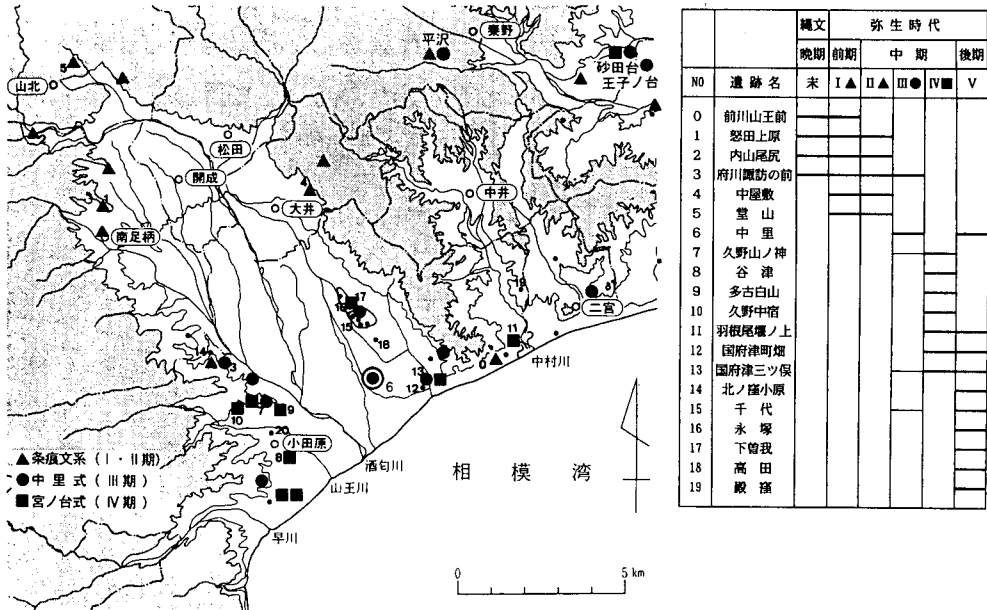
(1) 南関東の低地占地型集落

中里遺跡の調査成果の最たるものはその集落構造の解明にあらう。ただし、その具体像は報告書の刊行をまってから検討するとして、ここでは集落立地と規模・性格のみをとり上げる。

従来関東地方の弥生時代中期の集落は、鶴見川流域・荒川（旧入間川）流域・東京湾東岸いづれにおいても台地の縁辺部に立地するのが特徴とされてきた。ところが中里遺跡は、足柄平野のなかの微高地に立地する点で、関東では特異な集落立地であると思われた。しかし、水稻耕作を基礎とする弥生時代集落は、静清平野以西の諸地域では低地に立地するのがむしろ一般的であって、それゆえに関東の集落立地が特徴的と見られてきた訳である。台地上に集落を構えるのは駿豆地方の田方平野も同様で、仁田仲道遺跡や向原遺跡・寺尾原遺跡などが台地上に立地するが、長伏遺跡群・矢崎遺跡など低地に立地する集落もあり、各々拠点として継続し併存して行く（近藤 2000）。もちろん静清平野や濃尾平野では大形集落を構えるに適した台地はきわめて限定され、一方南関東では台地が発達してこれを谷が樹枝状に開析するという地形的条件の違いが大きく作用している。しかし中里遺跡という最初期の本格的な農耕集落がやはり低地に立地していることの意味は十分に検討に値するであろう。

筆者はさきに、中里遺跡のような沖積低地に立地する集落を低地占地型集落として、その立地と拠点性に注目した（石川 2000a）。こうした理解の起点は足柄平野における集落の分布と消長にある（第 11 図）。中里期の遺跡は、低地部にある中里遺跡が突出した規模をもち、その周辺には東側に三ツ俣遺跡・千代遺跡、西側に小田原城香沼屋敷第Ⅲ地点・山ノ神遺跡群・府川諏訪の前遺跡が点在する。住居跡 3 基が検出された香沼屋敷第Ⅲ地点は狭隘な谷合いにあり、他は土器が検出されたのみであるから、いずれも中里遺跡とは対照的に住居数軒からなる小規模な集落遺跡と考えられる。中里期集落群の中で中里遺跡が突出した内容を備えることは明らかであり、その占地も東西両遺跡群の要の位置にある。

問題は、竪穴住居の切り合いが最大 3 基に及ぶとしても、中里集落は中里式土器の中で収ま



第11図 小田原周辺の弥生中期遺跡の分布と消長（大島 2000 に加筆）

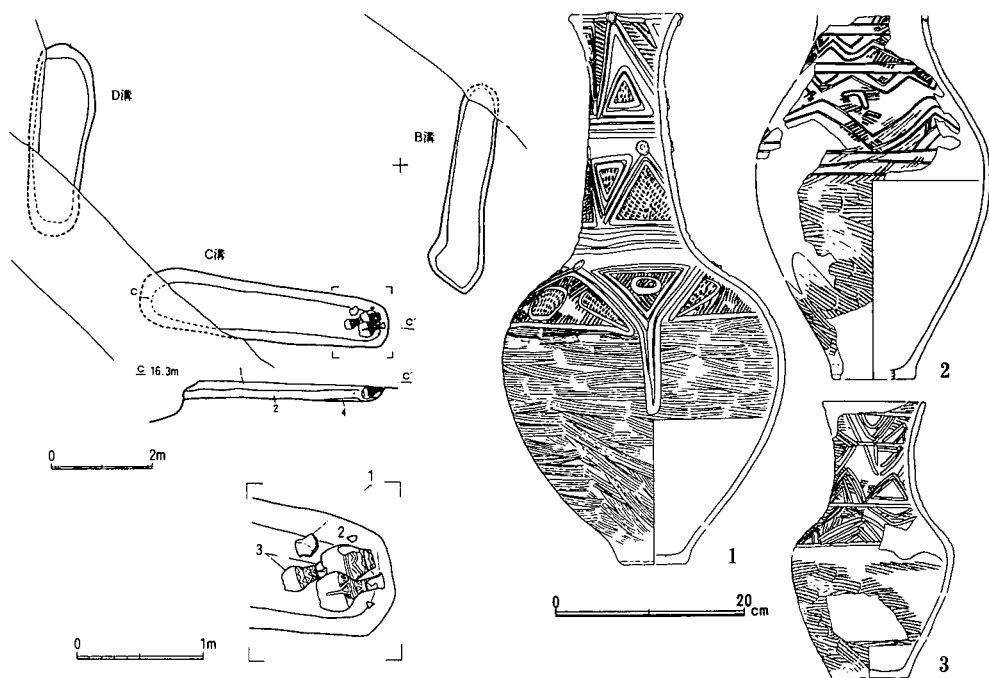
比較的短期間のうちに姿を消すことをどう評価するかにある。その場合に注目したいのは、中里遺跡第Ⅲ地点の東約 150 m の地点にあたる矢代遺跡が発掘調査され、少ないながらも中里式とともに宮ノ台式の破片が出土している点である（柏木 2000）。詳細は全く不明ながら、近接地点に宮ノ台期集落が存在する可能性があり、中里集落とのつながりが考慮されよう。この遺跡と中里遺跡とのつながりが当面不明であるとしても、国府津町畑・三ツ俣遺跡が宮ノ台期の遺跡として隣接する。町畑遺跡（坂詰 1959）は内面櫛目鎖状文をもつ甕を含む安藤編年Ⅱ～Ⅳ期の資料を含む。小田原式土器の標式遺跡である谷津遺跡は、柴田常恵調査資料には中里式に後続する所謂小田原式を含む宮ノ台期の全期間の資料があり、環濠と思われる V 字溝も写真に残っているという⁽³⁾。また、谷津遺跡の北 2km の舌状台地にある山ノ神遺跡群の場合は、中里期から遺跡形成が始まり、宮ノ台期には方形周溝墓群が造成される。確認はされていないが集落も広がっていたに違いない。中里期から宮ノ台期への継続が確実視される遺跡として重要である。さらに、東部瀬戸内系土器の属性を受容して成立した中里式の広口壺が宮ノ台式に継承されたことをさきに述べたように、中里式は当地域における宮ノ台式土器成立の基礎をなしている。したがって、中里遺跡に端的にみるように中里期から宮ノ台期へと集落の断絶はあるとしても、このような諸例から判断して、足柄平野南部の地域社会としては継続していると理解する。中里期にみられた中里集落の突出した拠点性は薄らぐとしても、平野の東西に位置する国府津町畑・三ツ俣遺跡群と谷津遺跡が新たな拠点としての役割を果たしたと考えるのである。

(2) 南関東の低地占地型遺跡

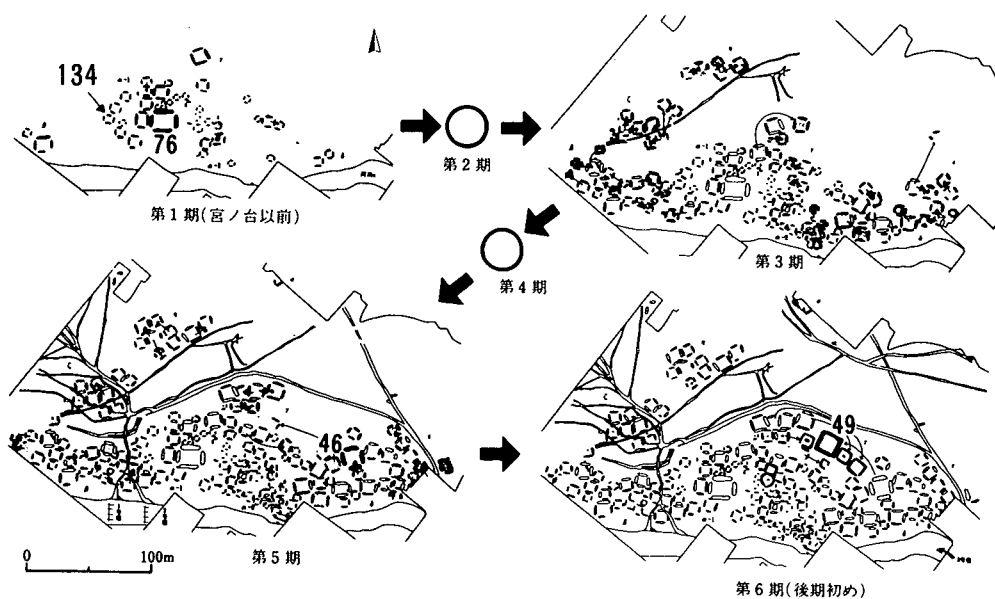
それでは中里期における中里集落のような突出した拠点性は、他地域あるいは宮ノ台期においても認められるのであろうか。筆者は、千葉県常代遺跡の占地と方形周溝墓造営の連続性などから、同様の拠点性は東京湾東岸にも中里併行期から認められ、相模川流域や鶴見川流域でも可能性を考えておいてよいと考える。常代遺跡は、小糸川下流低地の上流寄りの自然堤防上に立地し、弥生中期～古墳前期の方形周溝墓 160 基が検出され、ほとんどは弥生中期に属する。未調査区を含めると墓域は約 30 ha に及ぶと思われる。そのうちもっとも広く調査された墓域 A について甲斐博幸氏は、宮ノ台式の前段階から久ヶ原期までいくつかのグループごとに連続と方形周溝墓が造営される過程を復原している（甲斐 1998）。第 1 期（甲斐論文の第 2 期）の方形周溝墓は大形の 76 号をはじめ 17 基からなる。第 13 号方形周溝墓の東 B 溝中央で利根川中流域から搬入された可能性が高い壺（第 10 図 1）、第 134 号方形周溝墓では南 C 溝東端から 3 個体の壺（第 12 図 1～3）が折り重なるように出土した。第 13 号墓の壺は出流原式・池上式のいずれか判断に苦しむ資料で、重厚な頸部は出流原式的だが、胴部の菱形構図の交点を点列で処理する点は出流原式でも新しい部分である出流原遺跡第 2 号墓坑から顕著になる手法である。第 134 号墓の土器は 3 点とも胴部と頸部・口縁部に同種の構図を配置する点に特徴があり、平沢式遊ヶ崎段階に特に顕著な手法（鈴木 2001）である。また、1 のような Y 字状文が胴部文様帯下方まで突き出す構図も山梨県南大浜遺跡など城ヶ島段階に散見される。千葉県大多喜町船子遺跡例は構図の細部に至るまで 1 と共通する。ただし、1 は口縁部文様帯が城ヶ島遺跡例よりもはるかに拡張し、頸部文様も拡張が顕著で、平沢式や城ヶ島段階ではみられない細線で構図を描く 2・3 を伴う。また船子遺跡では格式の壺が共伴するようであるから、城ヶ島段階よりも一段階下の中里式併行と見た方がよかろう。したがって、常代遺跡の方形周溝墓群の造営は、確実には中里・池上併行期、さらに第 13 号方形周溝墓の壺を手がかりとして一段階遡る出流原式新段階・城ヶ島段階に始まる可能性があることになる。

常代遺跡では河川跡 a・b の周囲に墓域を造営するが、その河川跡 a に合掌形堰を設けて取水し、墓域の下流側に広がる水田に配水する。堰の造営時期は宮ノ台期でもっとも新しい段階とされる（甲斐 1998）が、墓域の継続性からみて方形周溝墓造営開始と並んで下流側で水田開発が始まったと考えるのが合理的であろう。また、居住域自体は検出されていないが、河川 a に沿って上流～下流側にのびる居住域が想定されたり（君津郡市 1990—5 頁）、上流側と考えられている（甲斐 1998—42 頁）。河川跡 a からは未製品を含む多量の木製品や生活資材が検出されていることからすれば、少なくとも上流側の沖積低地微高地に居住域が広がることは確実視される。それは、中里遺跡の方形周溝墓墓群と居住域との関係を参考にすれば、当然ながら常代遺跡第 1 期の墓域面積を凌ぐ規模の居住域を想定することになる。

東京湾東岸では常代遺跡以外に宮ノ台期以前に遡る低地占地型遺跡は見当たらない。しかし



第134号方形周溝墓と出土土器（甲斐1996）



常代遺跡の墓域変遷（甲斐1998より作成／石川1999c）

第12図 常代遺跡第1期の方形周溝墓と墓域の変遷

宮ノ台期には小櫃川流域に、環濠集落の西原遺跡、篋描き擬似流水文土器を出土した大寺住吉遺跡、宮ノ台式末期の住居跡を検出した菅生遺跡、養老川流域では方形周溝墓群を検出した山田大宮遺跡などが沖積低地に立地しており、各々その成立時期や地域における性格が注目される。そして常代遺跡と同時期の小糸川流域遺跡群は不明瞭だが、小櫃川流域遺跡群の状況を併せ考えると、常代遺跡が小糸川下流域遺跡群の中核的役割を果たしたとみるのが自然である。

さらには、中核である中里遺跡が途絶する足柄平野遺跡群とは異なって、常代遺跡は中里併行期から宮ノ台期を通して中核として持続した点に注目したい。

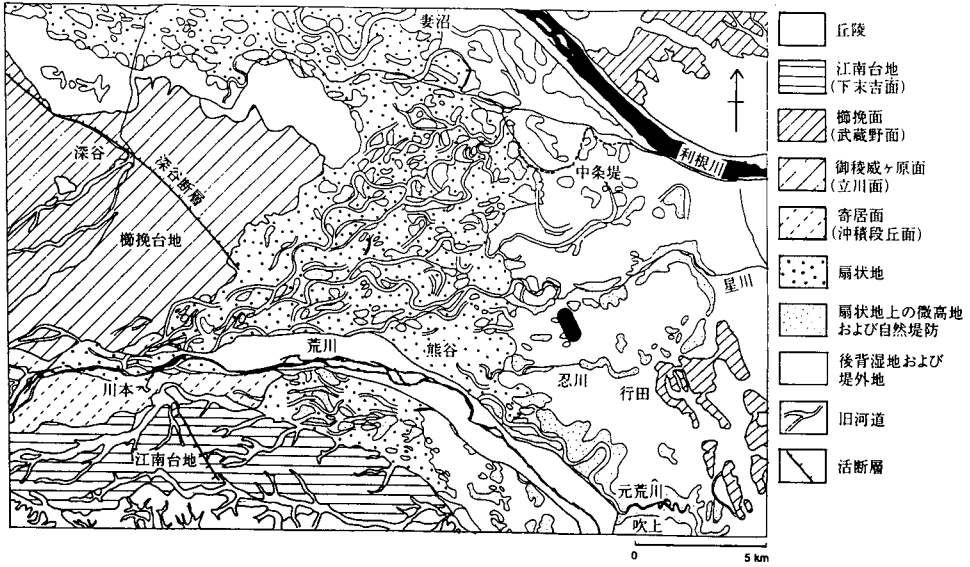
相模川流域では、集落内容が分かる遺跡はこれまでのところいずれも台地上に立地する。しかし、沖積低地内にある遺跡の調査例をみると、金目川沿いの微高地にある沢挾遺跡で宮ノ台式土器とその直前の土器が検出されているほか、宮ノ台期の遺跡として坪ノ内・南原B・田村館・大原の各遺跡が沖積低地や湘南砂丘の内側に立地している（平塚市博 1999）点は、中里遺跡や常代遺跡との関わりで注意しておくべきである。

さらに、中里・常代遺跡のような地域社会における突出した拠点性が、その後どのように継承されたかを考える時、鶴見川流域遺跡群における折本西原遺跡や権田原遺跡の存在が気になる。中里期の足柄平野とは異なって、宮ノ台期の鶴見川流域では大塚遺跡や矢崎山遺跡など2 ha 余りの規模をもつ環濠集落が10 か所余り群在して地域社会が構成される。そのなかに、鶴見川流域でもっとも広い沖積低地をかかえる地点に当初約4 ha、のちに8 ha 以上の規模に拡張する折本西原遺跡が占地し、鶴見川の支流である早渚川流域の下流部に約4 ha の権田原遺跡が占地する。早渚川流域遺跡群における権田原遺跡、早渚川流域遺跡群を含む鶴見川流域遺跡群における折本西原遺跡の突出度は明瞭であり、中里期における中里遺跡の拠点性と足柄平野遺跡群の関係がより発展した姿として捉えることが可能であろう。それは、中里遺跡のような低地占地型拠点集落の存在が、単に一過性のものではなく、次の南関東弥生社会の展開に重大な影響を与えたものと理解することとなる。

(3) 池上・小敷田遺跡の位置付け

では、中里併行期に低地占地型集落が展開し、以後の弥生社会を方向づけるのは南関東だけであろうか。中期中頃の社会を具体的に探る糸口となった埼玉県池上・小敷田遺跡もまたその範疇の遺跡と理解できるのではないか。次に池上・小敷田集落の内容を点検しよう。

池上・小敷田遺跡⁴⁾は埼玉県熊谷市・行田市にあって、秩父山地に発する荒川が関東平野に流れ出て形成した荒川扇状地の扇端付近に立地する。荒川から扇状に分流する星川と忍川との低地部である（第13図）。調査によって小敷田1・3・4・5区の4か所で検出された河川は、北北西（星川側）から南南東（忍川側）に向かって大きく蛇行して流れる1本の河川と判断される（第14図）。遺構分布をみると、池上・池上西・小敷田1～3区（北集落と仮称）と、小

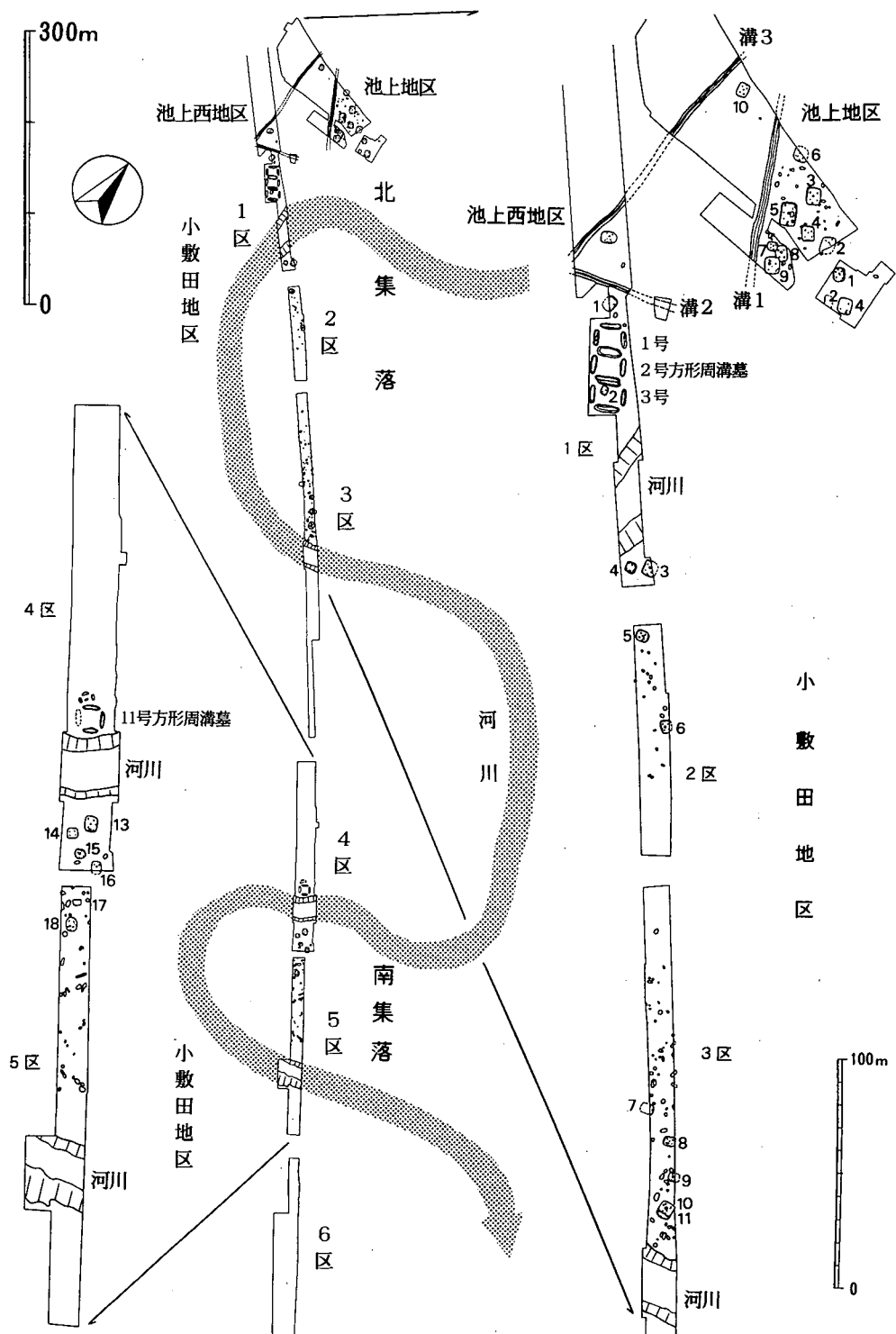


第13図 池上・小敷田遺跡の地形環境（貝塚ほか 2000 に加筆）

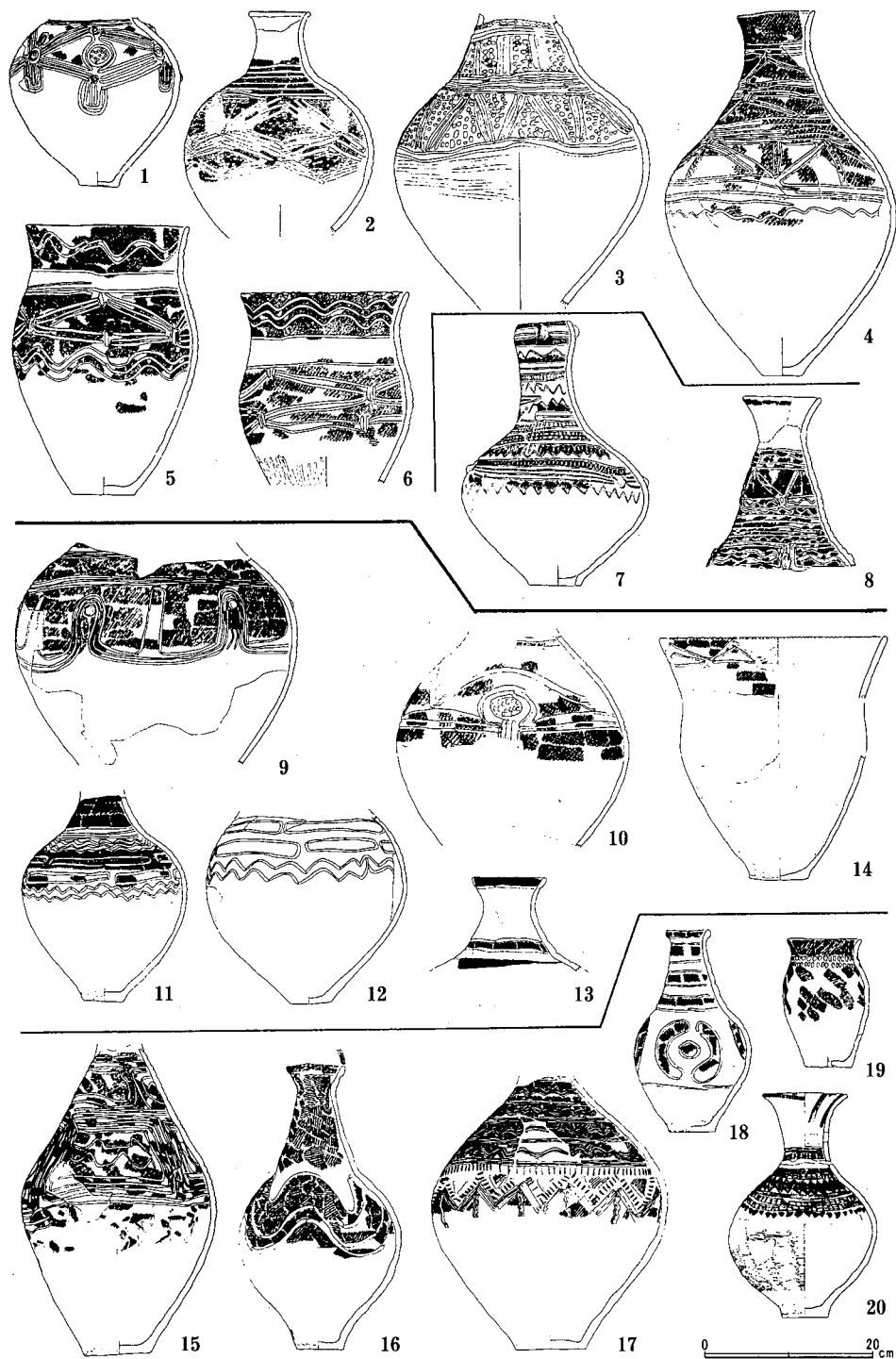
敷田4・5区（南集落と仮称）との2か所に集中し、その間の3区南半から4区北半に遺構の空白地があり、プラント・オパールが検出されて水田域の可能性が指摘されている。北集落到3基、南集落到1～2基とそれぞれ方形周溝墓群が造成されていることも、両集落の独立性を示すと判断される。そして北集落では、確実に弥生中期である1号溝^⑥が、おそらくは蛇行する河川を繋いで東側居住域をD字形に区画しており、そこに調査区内だけで竪穴住居10基が検出された。一方1号溝の西側は、池上地区で1基、池上西地区で1基、小敷田1区河川北西側で2基と住居の分布が散漫となっており、東側が居住域の中心と判断できる。北集落南側では小敷田1区南端から2区にかけて4基、3区に5基の竪穴住居が検出されているが、ともに蛇行する河川の左岸の自然堤防上に築かれているから、C字形に曲がる带状居住域の2か所を検出したことになる。一方南側集落では、4区河川の南側から5区にかけて7基の住居跡が検出され、河川の北側対岸に方形周溝墓1～2基が造成される。ではこれら集落の変遷はどのようなのであろうか。次に土器の編年観を提示し、それをもとに検討しよう。

（4）池上・小敷田遺跡出土土器の編年と集落の推移

池上地区と小敷田地区の出土土器を比べると、一方で主体をなす一群が他方では少ないという傾向があって、池上式土器を古・新の2段階に区分でき、さらに小敷田地区でより新しい特徴を備えた一括資料を指摘できる。第15図1～6は池上地区で主体を占める古段階の土器群、7・8は池上地区の新段階、9～14は小敷田地区で主体を占める新段階の土器群から一括資料を例示した。古段階の壺は菱形（1・2）や三角（3・4）・四角など単位文が明瞭で、平沢式以来



第14図 池上・小敷田遺跡の全体図（各報告書を合成して作成） 拡大図中の数字は住居番号



1~8: 池上地区1号溝, 9~14: 小敷田地区44号土坑, 15~20: 小敷田地区第1号方形周溝墓

第15図 池上・小敷田遺跡出土土器の新古相

の構図を継承するもの(1)を含む。単位文の空白部に大きな刺突を充填する手法が顕著なことや、菱形・三角形の構図では両端の角をなす部分の沈線が反転部をもつなどの特徴がある。新段階では、刺突充填が後退したために構図が間延びした一群(9・10)や横長の枠形や波線といった帯を重ねた構図が顕著な一群(7・11・12)があり、菱形・三角構図両端の線を反転させる手法はなくなる。菱形や三角形と円文が結合する構図は古段階に明瞭で(1)、新段階では円文が独立する傾向が明瞭である(10)。四角形の構図は新段階でより顕著である(8)。口縁部下の無文化は古段階(2)よりも新段階でより顕著となる(8・13)。甕では、古段階では口縁部文様帯と胴部文様帯がともに幅広く、頸部の素文帯による両文様帯の区分が明瞭である。新段階では三角・菱形連繋文が後退し、口縁部・胴部文様帯の幅が狭まり、頸部の区分も不明瞭となって、装飾の簡素化が進行する(14)。小敷田地区第1号方形周溝墓の15~20は、四角文が明瞭(15)、構図の簡素化(15・16・18)、帯の重層化(17)、甕の装飾の簡素化(19)など、古段階から新段階への変化がさらに進行している状況が確認できる。小敷田1区では、2号住居跡の上に3号方形周溝墓が構築されているから、1・2号住居→1~3号方形周溝墓という変遷が考えられる。これを援用すると、新段階の1・2号住居跡出土土器よりも1号方形周溝墓出土土器が新しいことが確認できる。

以上の編年観をもとに集落の変遷をみてみよう。まず、池上地区では、集落の中心地区を区画する直線溝(1号溝)が古段階に掘削される。蛇行する河川を直線溝で結んで区画とする方式は中里遺跡の場合と同じである。溝の覆土には新段階の土器も見られるので、新段階まで溝は埋没しきらずに機能を果たしたと分かる。東側の住居跡がいずれも1号溝と軸を揃えて構築されていることも、集落の存続期間を通して1号溝が機能したことを反映するであろう。1号溝東側の住居10基は、8号住居跡を7号と9号住居跡が切るように少なくとも2段階の変遷があるものの、4・5号住居跡が古・新段階の資料を含むように帰属時期を峻別するのは難しい。遺物の比率を援用すれば、住居は古段階が多く、新段階に少なくなると思われる。小敷田1区では新段階に1・2号住居が構築され、その廃絶後に1~3号方形周溝墓が造営される。1区南端・2・3区では5・6号住居跡出土土器に古段階が明瞭なほかは新段階が主である。4・5区では遺構内で古段階のまとまりを見出すのは難しい。つまり池上・小敷田集落は、池上式古段階に池上地区に溝で区画された中心的居住区が設けられ、新段階になると池上地区の集落が存続するとともに、小敷田1~3区と4~5区も居住域となり、北集落と南集落とが併存する。また池上・小敷田集落が南北両集落に拡張・二分されるのに伴って、各々河川対岸に方形周溝墓が構築されるようになる。そして、1号方形周溝墓出土土器に後続する土器は包含層中に少数見出すことはできても、調査区内から遺構として抽出することはできず、集落は急に縮少すると判断できる。しかし、本遺跡池上地区の北方約600mにある熊谷市北島遺跡では中期後半御新田併行期の住居跡70基が検出されている(吉田2001)。その位置関係は本遺跡北集落

の池上地区と南集落の小敷田4・5区の距離とほぼ同じであり、北島遺跡の上限が本遺跡の終焉時期と接点をもつようであれば、その継起関係も問題となってくる。すくなくとも近隣に後続する中期後半の大形集落が存在することは注目に値する。

以上のように集落の推移を概略復原してみると、池上・小敷田遺跡も池上地区を中心とする低地占地型集落の範疇で理解することが可能であろう。北島遺跡のような中期後半の拠点集落が隣接して構築されることも、地域の拠点として継続性をもつことを示すであろう。

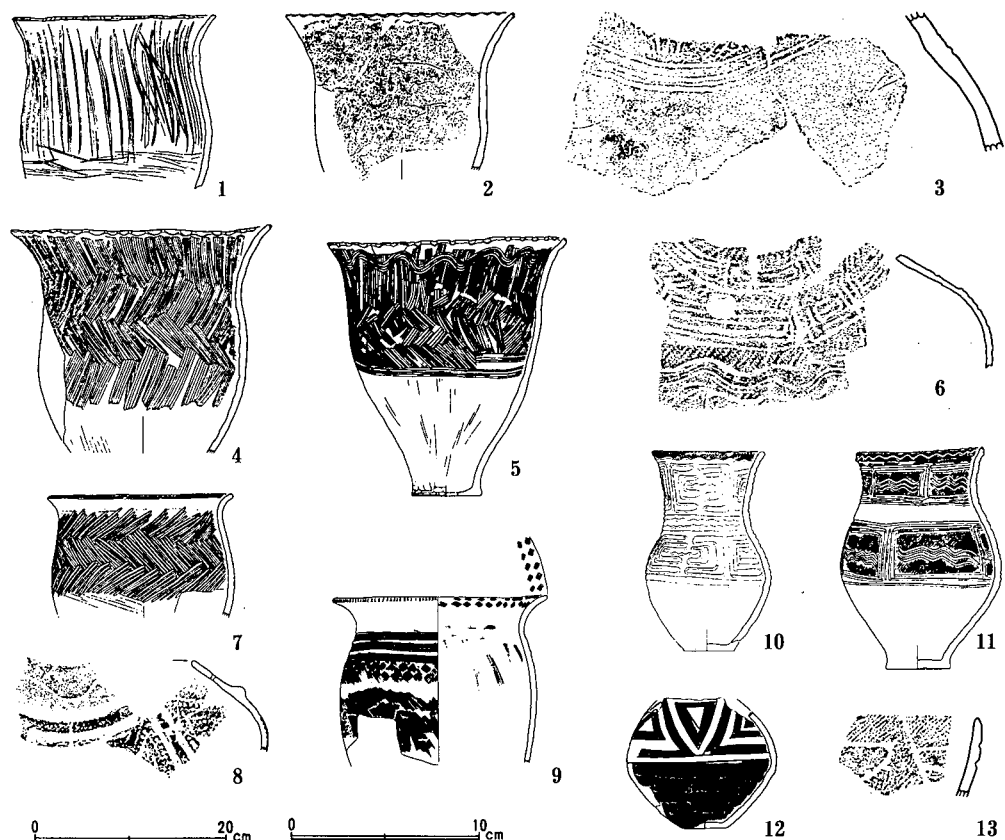
(5) 池上・小敷田集落と外来系土器

前項で、南関東の中里遺跡や常代遺跡と同様に、池上・小敷田遺跡も中期中葉段階に地域の拠点として形成された低地占地型集落と理解したが、そのもう一つの特徴である遠隔地系土器の存在という点はどうかであろうか。池上・小敷田遺跡もまた、複数の遠隔地系土器及び外来系要素の定着が明瞭に認められる。

本遺跡の最初の調査区で検出された池上地区1号住居跡で、まず東北地方南部に分布する南御山2式小形壺(第16図12)が池上式古段階土器と共伴していた。南御山2式系土器は小敷田地区3区の77号土坑でもみられる(吉田1991—第80図4)が、胴下半部のみであるために南御山2式・二ツ釜式いずれの範疇か決めがたい。ともにカナムグラの仲間の植物茎を回転施文した擬縄文である。1号住居跡では、東北地方南部でもいわき地方に分布する龍門寺式と酷似する鉢(第16図13)があり、7号住居跡や1号溝でも関係ある資料(中島ほか1984—第129図29・第57図183)がみられるが、小敷田地区にはない。

本遺跡において北からの系統を考える場合、筒形土器の存在は重要である。報告書で図示された例だけで池上地区で8点(第16図10・11)、小敷田地区で2点あり、池上地区では破片資料が20点に及ぶ。本来、福島県方面で西麻生式と南御山2式の間の型式群で普及した器種であるが、野沢式や神保富士塚遺跡など栃木・群馬方面でも定着している。したがって東北系とのみ表現するのは適切ではない。しかも、胴部装飾を上下に二分割することや方形構図を多用する点は本来の原則を踏襲しているが、口縁部以外は縄文を欠いたり(10)、頸部を無文の帯としたり(11)と変形されており、池上式の一器種とみなしてよい。カナムグラの仲間の植物茎回転による擬縄文がこの器種を中心に普及する点も、南御山2式や龍門寺式・野沢式とのかわりの強さを示している。さらに低めの脚部に円形や長方形の透かし孔をあけた高杯も、これら諸型式とのつながりを示すものである。

中部高地系統では、横羽状条痕(4)や条痕地に櫛描き文の甕(5)、口縁部を一段厚く作り、それ以下を条痕とした甕(中島ほか1984—第45図44など)は栗林式の前段階、さらに口縁部を強く横ナデして外反させて端部に縄文を施文した甕(7)や8の無頸壺は栗林式古段階に対比できる。6も栗林式古段階かその直前であろう。そして、なかでも中部高地系条痕甕は従



1・2：南関東系，3：瓜郷式系，4～8：中部高地・栗林式系，9：小松式系，10・11：北関東系，
12：南御山2式，13：龍門寺式系

第16図 池上・小敷田遺跡の外来系土器

来須和田式系と呼ばれてきた有文甕とともに池上式の甕を折半するように存在しており，池上式の甕と理解してよい。ただし，有文甕や壺とは異なって，白雲母を特徴的に含むことの意味は今後の検討課題としたい。

南関東系としては，すでに触れたように中里式系統の1がある。ハケ調整甕の2は中里式よりも宮ノ台式とした方がよいであろうが，南関東系であることに変わりはない。さらに遠隔地系統の土器として，実見を果たしていないが，1号溝出土の壺肩部破片3の内面にみられる頸胴界の段や，その位置より上の外面に施された文様は，瓜郷式系統に酷似する。もしこれを瓜郷式系統と認めてよければ，有東遺跡や常代遺跡の西方遠隔地系土器と一連の現象と理解することになる。

さらに池上・小敷田遺跡では，北陸に分布する小松式系統の土器が明瞭に認められることも際立った特徴である。壺（第15図20）・甕（第16図9）・無頸壺（吉田1991—第128図152-1）など各器種があり，壺は細頸壺と受口状口縁壺，甕は胴部外面に櫛描文をもつ一群と

素文の一群のと双方が認められる。これら小松式は典型小松式段階及びその直前段階（石川 2000d）に相当する資料群であり、関東ではほかに埼玉県大里村円山遺跡（若松 1986）と東京都文京区小石川町遺跡（加藤 1994）で確認されただけで、本遺跡でまとまって出土するのは異様とも思える。搬入か模倣かはさておき、長野県の千曲川沿いの経路を考えないと当地域での出現は理解できないが、千曲川沿いでは現在まで対比できる資料は検出されていない。栗林式成立期ないしその直前であるから、この時期の資料が千曲川沿いではいまだに少ない現状を考慮するとしても、異様である。あたかも中間地帯に類例を検索できない中里遺跡の東部瀬戸内系土器を思わせるあり方である。

では、これら遠隔地系土器・要素は池上式のどの段階にも等しく認められるのであろうか。

池上地区では古段階の資料が多く、小敷田地区は新段階が多いことを手がかりとして、報告書に掲載された各系統資料が各地点ごとに出土数に差異があるかを示したのが第1表である。スラッシュ左のゴチック数字が図化された資料、右は拓本で示された資料である。龍門寺式・中里式・瓜郷式の各系統土器は例数が少ない点に留意が必要だが、池上地区に限られることは注意してよい。東北・北関東系の筒形土器は池上地区に多く、小敷田地区にやや少なめの傾向がある。栗林式系統は池上・小敷田地区ともに見られるが、池上地区の破片7は2～3個体分のである。表には示さなかったが中部高地系の条痕甕は池上・小敷田地区ともに多い。小松式系は池上地区に少なめで、小敷田地区に多い。

以上のことから、①南御山2式・龍門寺式・中里式・瓜郷式の各系統土器は古段階の可能性が高い、②筒形土器は古段階に普及し、新段階に減少する、③中部高地系統は古段階・新段階ともに普及しており、栗林式は新段階に伴う可能性が高い、④小松式系は新段階に伴う可能性が高い、という諸点を指摘できよう。そして、①のうち南御山2式・龍門寺式系については池上1号住居跡で古段階土器と共伴したこと、③④は小敷田5区205号土坑・18号住居跡と4区第11号方形周溝墓・1区第1号方形周溝墓（第15図15～20）で池上式新段階と共伴したことから検証できる。したがって、古段階には南御山2式・龍門寺式や東北・北関東系筒形土

第1表 池上・小敷田遺跡地区別外来系土器出土数

		南御山2	龍門寺系	筒形土器	栗林式系	中里式系	瓜郷式系	小松式系
北 集 落	池上地区	1/	/ 2	8/22	2/ 7	1/	/1	1/ 3
	1区北/方周							1/
	1区南～3区	1/		1/14	/ 2			/ 1
南 集 落	4区北/方周				/ 2			3/
	小敷田4～5区			3/ 3	1/ 7			4/26
合 計		2/	/ 2	12/39	3/18	1/	/1	9/30

図化/拓本

器、中里式・瓜郷式・中部高地系の外来系土器ないし要素、新段階には栗林式土器と小松式系土器が受容されているとみてよい。

そしてこれを再度遺跡に戻してみると、北集落の池上地区と南集落小敷田地区に外来系土器・要素が明瞭なのに対して、北集落の小敷田2・3区ではこれが稀薄である⁶⁾。つまり一つの遺跡・集落の中でも外来系土器が明瞭な地区と、そうでない地区とが併存している点は注目すべきであろう。この段階の外来系土器はどの遺跡でも均一に現れるのではなく、遺跡や地域の性格ごとに個性をもっている。地域ごとに隣接地域との関わりに違いがあるのは当然であるし、さらに一つの地域の中でも遺跡の性格の違いによって外来系土器の受容の仕方が異なる。中里式土器分布圏内でも、低地占地型集落で、最たる拠点である中里遺跡では外来系土器、とりわけ沿海性から遠隔地系の東部瀬戸内系土器が顕著であるのに対して、より小形集落で内陸性の王子ノ台遺跡では外来系土器・要素は中部高地や北関東方面との繋がりがより明瞭である。東京湾東岸でも常代遺跡のように遠隔地系土器が明瞭な遺跡がある。同様に、荒川中流域においても低地占地型集落である池上・小敷田遺跡では遠隔地系土器が明瞭である一方で、小敷田2・3区のように外来系土器が稀薄な遺跡があり、さらに独立した形で周辺に点在していると考えられる。こうした状況は、低地占地型集落が本格的な稲作農耕社会の形成期に地域の拠点となり、周辺地域や遠隔地との情報が中継・集約される役割を果たしたことを示すと考えられる。

6. 墓制の転換 ―再葬墓から方形周溝墓へ―

弥生中期中葉の中里・池上併行期が関東における本格的な稲作農耕社会の定着期であることは、中里遺跡、常代遺跡、池上・小敷田遺跡の3遺跡のデータからみて明らかである。また中里遺跡と池上・小敷田遺跡自体は中期後半に継続しないとしても、地域社会としては持続する。そうした地域社会の転換期にあって、集落のみならず、伝統的な墓制の面でも再葬墓から方形周溝墓への転換が進行した。

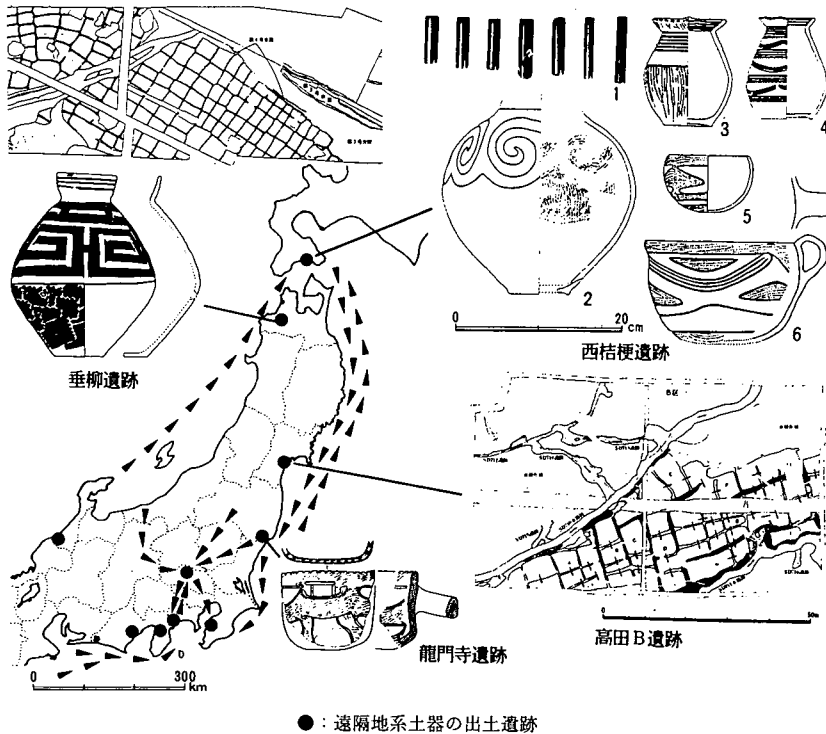
関東地方では、この中期中葉から方形周溝墓が姿を見せ始めることは、中里遺跡第Ⅲ地点、常代遺跡、池上・小敷田遺跡の例から明らかである。このうち池上・小敷田遺跡の南北2集落に対応する2か所計4～5基の方形周溝墓は、この集落が形成された当初から造営されたものではなく第11号方形周溝墓が示すように池上式新段階からと考えられるが、宮ノ台併行期まで下る訳ではない。そこで問題となるのが再葬墓との関係である。現在のところ、壺棺再葬墓のもっとも新しい段階の実例は千葉県野田市勢至久保遺跡（飯塚1982）や今春調査された埼玉県庄和町須釜遺跡で、池上式直前ないし池上式古段階併行である。したがって南関東で方形周溝墓が出現した段階にはなお再葬墓が造営されていたと見た方がよい⁷⁾。その際に注目されるのが常代遺跡第134号方形周溝墓（第12図上段）や池上・小敷田遺跡第1号方形周溝墓

(第15図下)における土器の埋設法で、すでに春成秀爾氏が指摘したように(春成1993)、周溝の土橋際に壺を集中して埋設する方式は再葬墓の場合と酷似する。しかも常代第134号方形周溝墓の土器1は、千葉県大多喜町船子遺跡(斎木・深沢1978)で3個体の壺が石で囲われており壺棺再葬墓と考えられる壺の1例と酷似しており、時期的な問題はもちろんのこと、同一種類の壺が同じ時期に近接する地域間で異なる墓制—在来伝統の再葬墓と新来の方形周溝墓—に参画している事例とみなせる。このような事例から判断すると、常代遺跡や池上・小敷田遺跡のように低地占地形集落で方形周溝墓が採用される一方で、その周辺の小集落では在来の壺棺再葬墓がなお存続し、また両者が一つの地域社会を構成するために同じ種類の土器が集落間で異なる墓制に参画する状況にあったとみられる。常代遺跡第13号方形周溝墓で池上式もしくはその直前型式の壺が採用されているのも同様に理解することができよう。

7. 東日本弥生社会の変革期—まとめにかえて—

以上述べてきたように、弥生中期中葉の中里・常代・池上期に、南関東から荒川中流域までの範囲で低地占地形集落が各地に出現し、小規模集落の群集を組織する拠点の役割を果たした。こうした低地占地形集落は外来系土器やその要素を多くもつように、他地域や遠隔地との情報交換・物資の流通の上でも中核的な役割を果たした。また、周辺の小集落は集落規模や立地のみならず、墓制の点でも在来の伝統を色濃く残した可能性が高く、人口規模はさておき地域社会の中で集落の数自体は周辺集落の方が勝るであろう。こうした二つの異なるタイプの集落から一つの地域社会が構成される、つまり在来と新来の二重構造の地域社会が編成された。そして各地とも次の中期後半にも引き続いて集落群が認められるように、それらは中期後半宮ノ台併行期の各地域社会の基礎となった。宮ノ台期の鶴見川流域遺跡群をみると、その形成期には折本西原遺跡や大塚遺跡のように環濠を備え、環濠外に墓域を設けた大形集落が並立するとともに、老馬遺跡など居住域と墓域が分離しない小規模集落も少ないながら認められる。地域社会の拠点たる大規模集落とともに小規模な周辺集落が併存する点に中里併行期の地域像が受け継がれるが、もはや中里併行期のような二重構造はない。中期中葉から後半への推移の中に、地域社会の再編が持続し達成される様子を見ることができよう。中里併行期は南関東の弥生社会の重要な転換期であったが、その転換が地域社会全般にわたって構造的に達成された訳ではなかった。そうした意味では中期前半から中期後半への過渡的な側面もあると言えよう。

さて南関東から荒川中流域だけにこうした転換・変革が起きた訳ではない。この変革が東海・西日本方面との情報交換を基礎として初めて達成されたことから明らかなように、広い範囲で連動して実現したものである。そしてそれは南関東以西という範囲にとどまらない。中里・池上期が南御山2式や龍門寺式、典型小松期直前に該当することを手がかりにすると、北陸西部では石川県八日市地方遺跡や次場遺跡のような、それ以後地域の中核となる集落が確立し、



第 17 図 東日本における弥生中期中頃の広域変動（石川 2000c に加筆）

北陸北部では小松式系統土器が進出して南御山 2 式と接触を起こしている（石川 2000d）。さらに北方の津軽平野で本格的な水田経営が実施されるのも垂柳遺跡で南御山 2 式土器が検出されたようにほぼ同時期であろうし、津軽半島北東部にある宇鉄Ⅱ遺跡の土坑墓に管玉が多数副葬されるように、北陸産管玉が東北地方北部から北海道にもたらされ始めるのもこの頃からである。太平洋側に目を移すと、静岡県長伏六反田遺跡や千葉県常代遺跡にもたらされた龍門寺式の本拠地であるいわき地方では、龍門寺遺跡に恵山式との関連が考えられる把手付鉢があり、恵山文化の函館市西桔梗 B 遺跡では龍門寺式との関係を思わせる土器が認められる（鈴木 2000b）。仙台平野で用配水路を備えた水田構構が出現するのは、高田 B 遺跡の例（高橋 1994）からみて柵形 1 式段階^⑧かその前段階のようである。このように、再度編年整備を行って点検する必要があるとしても、中里・池上・南御山 2 式併行期前後に東日本一帯に、さらには続縄文文化の領域をも含めて変革や変動が起きているように思われる。本稿でとり上げた地域と利根川以北の地域とでは変革・変動の内容は当然異なるとしても、壺棺再埋葬の消滅などのように相互に連動しているに違いないのである。その具体像を求める取り組みが必要であろう。

謝辞：本稿にかかるデータや資料のうち、中里遺跡については戸田哲也・河合英夫、王子ノ台遺跡については近藤英夫・秋田かな子・大島慎一、池上・小敷田遺跡については小川良祐・田

中英司・利根川章彦・西口正純・吉田稔、小田原周辺の遺跡群については大島・諏訪間順の諸氏にご教示・ご高配をいただいた。記して謝意を表したい。

注

- 1) 杉山氏はさらに、西摂弥生土器の頸部突帯が宮ノ台式土器の頸部突帯に継承されたとみなした。しかし、例示された大塚遺跡をはじめとする大形壺の頸部突帯は、その口縁部が受口状を呈する資料を多く含む点に明かなように、岩滑式など水神平式系統の器種が遠江西部に定着して白岩式の器種を構成したことに由来するものである。
 - 2) 報告書（大島ほか 2000）第 11 図 3・第 51 図 1。
 - 3) 黒沢浩氏のご教示による。
 - 4) 発掘調査は池上遺跡・池上西遺跡・小敷田遺跡の 3 遺跡名で実施され、報告された（中島ほか 1984・横川 1983・吉田 1991）。しかし弥生時代集落としては、いったん一連の遺跡として把握した上で議論する必要から、本稿では池上・小敷田遺跡と呼ぶ。そして各報告書の池上遺跡 1 号環濠を 1 号溝、池上西遺跡 1 号溝を 2 号溝、池上西遺跡 2 号溝＝池上 2 号環濠を 3 号溝と呼びかえた上で、池上遺跡を池上地区、本稿の 1 号溝以西・2 号溝以北を池上西地区、2 号溝以南を小敷田地区と呼び、さらに小敷田地区は調査区ごとに 1～6 区と呼び分けて記述する。
 - 5) 3 条のうち 1 号溝は、住居跡長軸との走向一致と多量の遺物が出土したことから弥生中期と断定できる。しかし 3 号溝は、遺物はごく少量しか検出されず、西側に 6m の間隔をおいて平安時代の 1～3 号掘立柱建物跡群が見事に平行すること、またほぼ南北方向に走るといった特徴から、弥生時代とみなすことに躊躇する。2 号溝も、池上西地区では 3 号溝と断面形が一致すること、弥生時代遺物が希薄なことから、3 号と同じ判断に傾く。
 - 6) 1～3 号方形周溝墓をこの集落の墓とすると小松式の壺 1 点（1 号-3）が伴うこととなる。
 - 7) 荒川中流域方面では、池上・小敷田遺跡第 11 号方形周溝墓が池上式新段階であるから、再葬墓の消滅と相前後する可能性はある。
 - 8) 筆者は現在、従来の榊形式を高田 B 段階と中在家南段階の 2 段階に峻別したいと考えている。従来の榊形式との相違を混乱なく示すには高田 B 式・中在家南式という型式名が適切と思うが、ここでは内容を提示できないので榊形 1・2 式と表示しておく。
- （補注）脱稿後、阿部泰之氏から 6 は仙台平野資料と対比させると榊形 1 式よりも 2 式に近いとの教示をうけた。したがって龍門寺式よりも下る大畑貝塚 A 地点資料（大畑 A 式とする）と対比すべきである。

参考文献

- 芦川忠利・尾鷲達美 1999『長伏六反田遺跡』三島市教育委員会
- 安藤広道 1991「弥生時代集落群の動態」『調査研究集録』8、横浜市埋蔵文化財センター、pp. 133-164.
- 飯塚博和 1982『千葉県野田市半貝・倉之橋・勢至久保』野田市遺跡調査会
- 猪狩忠雄・高島好一・廣岡 敏 1985『龍門寺遺跡』いわき市教育委員会
- 石川日出志 1985「関東における弥生時代のはじまり」『<条痕文系土器>文化をめぐる諸問題発表要旨』愛知考古学談話会、pp. 21-22.
- 石川日出志 1992「関東台地の農耕村落」『新版古代の日本』8、pp. 73-94.
- 石川日出志 1996「東日本弥生中期広域編年の概略」『YAY！—弥生土器を語る会 20 回到達記念論文集—』弥生土器を語る会
- 石川日出志 1999a「南関東の弥生文化再考—小田原市中里遺跡の調査から—」『日本考古学 1998』明治大学考古学博物館友の会、pp. 9-19.
- 石川日出志 1999b「東日本における弥生文化の成立過程」『働かながわ考古学財団平成 10 年度発掘調

- 査成果発表会・公開セミナー 弥生時代の幕開け』pp. 43-48.
- 石川日出志 1999c「南関東の墓制」『季刊考古学』67, pp. 82-86.
- 石川日出志 2000a「南関東の弥生社会展開図式・再考」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』東京堂出版, pp. 739-760.
- 石川日出志 2000b「東日本における弥生文化の成立過程」『働かながわ考古学財団平成 10 年度発掘調査成果発表会・公開セミナー 弥生時代の幕開け：記録集』pp. 3-13.
- 石川日出志 2000c「中里遺跡と東日本の弥生時代」『平成 12 年小田原市遺跡調査発表会・中里遺跡講演会 発表要旨』小田原市教育委員会, pp. 13-18.
- 石川日出志 2000d「南御山 2 式土器の成立と小松式土器との接触」『北越考古学』11, pp. 1-22.
- 石黒立人・宮腰健司 1996「尾張（付：美濃）」『YAY！—弥生土器を語る会 20 会到達記念論文集—』弥生土器を語る会, pp. 289-305.
- 石野 瑛 1954「小田原市中里（鴨の宮）遺蹟と出土土偶」『人類学雑誌』63-4, pp. 149-153.
- 石野 瑛 1957「小田原市中里（鴨の宮）遺跡」『日本考古学年報』5, pp. 65-66.
- 石野 瑛 1961「神奈川県小田原市中里（鴨の宮）遺跡（Ⅱ）」『日本考古学年報』8, pp. 79-80.
- 伊丹 徹ほか 1991『国府津三ツ俣遺跡』同遺跡調査団
- 大島慎一 1997「小田原地方の弥生土器研究に関する覚書」『小田原郷土文化館研究報告』33, pp. 13-35.
- 大島慎一 2000「かながわの弥生文化からみた中里遺跡」『平成 12 年 小田原市遺跡調査発表会・中里遺跡講演会 発表要旨』小田原市教育委員会, pp. 7-12.
- 大島慎一ほか 2000『王子ノ台遺跡 第 3 巻 弥生・古墳時代編』東海大学
- 岡村 渉 1997『有東遺跡—第 16 次発掘調査報告書—』静岡市教育委員会
- 岡本孝之 1976「宮ノ台期弥生文化の意義」『神奈川考古』1, pp. 65-79.
- 小野和之ほか 1993『神保富士塚遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 甲斐博幸 1996『常代遺跡群』君津都市考古資料刊行会
- 甲斐博幸 1998「君津市常代遺跡の造墓過程」『君津都市文化財センター研究紀要』8, pp. 41-58.
- 貝塚聖平・小池一之ほか 2000『日本の地形 4—関東・伊豆小笠原—』東京大学出版会
- 柏木善治 2000「矢代遺跡」『平成 12 年小田原市遺跡調査発表会・中里遺跡講演会 発表要旨』小田原市教育委員会, pp. 36-39.
- 加藤元信 1994『小石川町遺跡』文京区遺跡調査会
- 亀井正道 1955「相模平沢出土の弥生式土器について」『上代文化』25, pp. 13-22.
- 亀井正道 1961「神奈川県秦野市平沢遺跡の土器」『弥生式土器集成 資料編』2, p. 50.
- 河合英夫 1999a「南関東弥生農耕形成期の集落—小田原市中里遺跡の調査—」『多摩考古』29, pp. 1-3.
- 河合英夫 1999b「小田原市中里遺跡」『働かながわ考古学財団 平成 10 年度発掘調査成果発表会・公開セミナー 弥生時代の幕開け』pp. 49-52.
- 神沢勇一 1961「三浦市城ヶ島出土の弥生式土器」『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』8, pp. 16-21.
- 神沢勇一 1963「三浦市遊ヶ崎遺跡調査概報」『横須賀市博物館研究報告』7, pp. 61-65.
- 神沢勇一 1966「弥生文化の発展と地域性—関東—」『日本の考古学』3, pp. 185-203.
- 君津都市文化財センター 1990『スエから須恵へ、須恵から周准へ』現地説明会資料第 20 集
- 呉地英夫・戸田哲也 1997『中里遺跡第Ⅲ地点発掘調査報告書』小田原市教育委員会
- 呉地英夫 1999「中里遺跡第Ⅰ地点」『平成 11 年小田原市遺跡調査発表会 発表要旨』pp. 6-10.
- 呉地英夫 2000「中里遺跡第Ⅰ地点第 2・3 期調査」『平成 12 年小田原市遺跡調査発表会・中里遺跡講演会 発表要旨』小田原市教育委員会, pp. 27-31.
- 近藤 舞 2000「駿豆地方の弥生時代中期後半の遺跡群」『静岡県考古学研究』32, pp. 22-46.
- 斎木 勝・深沢克友 1978「房総における弥生文化の摂取とその波及について」研究紀要 3, 千葉県文化財センター
- 坂詰秀一 1959「神奈川県小田原市町畑出土の弥生式土器について」『上代文化』29, pp. 40-46.

- 篠宮 正 1996「弥生中期中頃から後半の土器」『神戸市西区玉津田中遺跡 第6分冊』兵庫県教育委員会, pp. 187-235.
- 島田哲男 1988『来見原遺跡Ⅱ』大町市教育委員会
- 杉原荘介 1961「神奈川県小田原市中里（鴨の宮）遺跡（Ⅰ）・（Ⅱ）」『日本考古学年報』8, p.79.
- 杉原荘介 1968「南関東地方」『弥生式土器集成 本編2』pp. 110-116.
- 杉原荘介 1981『栃木県出流原における弥生時代の再葬墓群』明治大学文学部研究報告（考古学）8.
- 杉山浩平 1998「小田原市中里遺跡の弥生土器から」『史峰』24, pp. 11-20.
- 杉山博久 1968『小田原市府川出土の弥生式土器』
- 杉山博久 1970「中里遺跡出土の土器と二・三の問題」『小田原地方史研究』2, pp. 1-7・13.
- 杉山博久・湯川悦夫 1971『小田原市諏訪の前遺跡』小田原考古学研究会
- 鈴木正博・鈴木加津子 1980「女方文化研究（Ⅰ）一平沢式の東進・北上について一」『第4回茨城県考古学研究発表要旨』pp. 51-52.
- 鈴木正博 2000a「『宮ノ台式』成立基盤の再吟味」『日本考古学協会第66回総会研究発表要旨』pp. 90-94.
- 鈴木正博 2000b「明神越式の制定と恵山式縁辺文化への途」『茨城県考古学協会誌』12, pp. 15-39.
- 鈴木正博 2000c「木戸口貝塚論序説」『利根川』21, pp. 28-39.
- 鈴木正博 2001「『王子台』の頃、そして『王子ノ台』から」『日本考古学協会第67回総会研究発表要旨』pp. 69-74.
- 高橋栄一 1994『高田B遺跡一第2次・3次調査一』宮城県教育委員会
- 武井則道 1996『老馬遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告21, 横浜市ふるさと歴史財団
- 戸田哲也 1999「東日本弥生農耕成立期の集落一神奈川県中里遺跡一」『季刊考古学』67, pp. 87-90.
- 戸田哲也 2000「中里遺跡の調査」『平成12年小田原市遺跡調査発表会・中里遺跡講演会 発表要旨』小田原市教育委員会, pp. 1-6.
- 永井宏幸 1994「沈線紋系土器について」『朝日遺跡Ⅴ』愛知県埋蔵文化財センター, pp. 363-376.
- 中島 宏・杉崎茂樹ほか 1984『池守・池上一一般国道125号線埋蔵文化財発掘調査報告書一』埼玉県教育委員会
- 中西道行・大川敬夫ほか 1985『下野遺跡』静岡県教育委員会・清水市教育委員会
- 中山正典・中鉢賢治 1994『瀬名遺跡Ⅲ（遺物編Ⅰ）』静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 浜田勘太・神沢勇一 1961「三浦市城ヶ島出土の弥生式土器」『横須賀市博物館研究報告』5, pp. 16-21.
- 春成秀爾 1993「弥生時代の再葬制」『国立歴史民俗博物館研究報告』第49集, pp. 47-91.
- 平塚市博物館市史編纂担当 1999『平塚市史11一別編 考古（Ⅰ）一』平塚市
- 横川好富 1983『一般国道17号熊谷バイパス道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ一池上西一』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 吉田 稔 1991『小敷田遺跡一一般国道17号線熊谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告一』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 吉田 稔 2001「熊谷市北島遺跡（弥生時代）の調査」『第33回遺跡発掘調査報告会』埼玉県考古学会, pp. 8-9.
- 若松良一 1986「大里村円山遺跡の調査」『第19回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉県考古学会

（2001年6月26日受付，2001年6月26日受理）

Drastic Social Change in First Century B. C. Kanto, Eastern Japan

ISHIKAWA Hideshi

This paper considers the possible historical background behind the sudden appearance of western-Japanese type agricultural settlements in eastern Japan in the first century B. C. Hypotheses of migration from the Pacific coastal region of central Japan or indigenous development have previously been proposed, aiming at the explanation for this phenomenon. Results of 1998 archaeological excavations at the Nakazato site, western Kanagawa Prefecture (southwestern corner of Kanto) tend to suggest that both hypotheses are not the case. It is then the aim of this paper to propose an alternative hypothesis. My argument is based on pottery typology, ceramic evidence of regional interaction, size and location of settlements, and mortuary evidence. In wide regions ranging from southern Kanto to northern Kanto (northern Saitama Prefecture), the following changes in material culture took place in the first century B. C. First, agricultural settlement of a full-fledged scale appeared in lowlands, adapting to wet rice cultivation. Such settlements then began to serve as nuclei of regional communities in the next chronological stage. Mortuary practices changed from secondary interment to the adoption of moated precincts. Long-distance exchange of information became very obvious. The first century B. C. happens to be a time of considerable change in other regions of eastern Japan, and I would speculate that such changes might be related to the social change in the contemporaneous Epi-Jomon culture in Hokkaido.

Keywords: Kanto of eastern Japan; middle Yayoi (first century B. C.); pottery; regional interaction; agricultural community.